

飯 氏 遺 跡 群 3

2004

福岡市教育委員会

い　い　じ
飯 氏 遺 跡 群 3

福岡市埋蔵文化財調査報告書第786集

2004

福岡市教育委員会

序 文

玄界灘に面して広がる福岡市は古くから大陸との玄関口として発展し、市内には数多くの遺跡や文化財が残されています。私たちはこれらの遺跡を後世に伝えていくことを願い、さまざまな形で遺跡の保護に取り組んでいます。

その一方で、最近の都市の発展により新しい開発事業が数多く手がけられ、そのために重要な遺跡が破壊され、失われつつあるという厳しい現実があります。福岡市教育委員会ではこれらの遺跡についてあらかじめ事前に発掘調査を行い、先人の足跡を後世に残せるよう、その記録保存に努めています。

本書は西区飯氏遺跡群第8次調査の成果を報告するものです。

本書が文化財保護の一助となるとともに、学術研究の資料として御活用頂けましたら幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで数多くのご協力をいただきました田中雅夫氏はじめとする関係者の方々に心より謝意を表します。

平成16年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 生田 征生

例 言

1. 本書は専用住宅建設に先立って福岡市教育委員会が平成8年度の国庫補助を得て平成8年11月6日から12月11日にかけて行った飯氏遺跡群第8次調査の調査報告書である。
2. 本書に掲載した遺構実測図の作成は大塚紀宣、永井大志、大塚拓史が行った。
3. 本書に掲載した遺物実測図の作成は大塚（紀）が行った。
4. 本書に掲載した遺構写真・遺物写真的撮影は大塚（紀）が行った。
5. 本書に掲載した挿図の整図は大塚（紀）が行った。
6. 本書で用いた方位は磁北で、真北から6°21'西偏する。
7. 本書で使用した遺構の呼称は、掘立柱建物をSB、竪穴住居をSC、土坑をSK、柱穴・ピットをSP、その他の遺構をSXと略号化している。
8. 遺構・遺物番号は基本的に各々通し番号で、一部欠番が生じる。製鉄関連遺物は別に番号を設ける。
9. 本書に関わる記録・遺物などの資料は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
10. 本書の執筆・編集は大塚紀宣が行った。

遺跡調査番号 9649

遺跡略号 IIJ-8

本文目次

第1章 はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 発掘調査の組織	1
第2章 遺跡の立地と概要	
1. 遺跡周辺の地形と環境	2
2. 飯氏遺跡群のこれまでの調査概要	2
第3章 調査の記録	
1. 調査概要	4
2. 積穴住居跡 (SC)	4
3. 掘立柱建物 (SB)	16
4. 製鉄・鍛冶関連遺構	18
5. その他の遺構・遺物	19
第4章 総括	
1. 飯氏遺跡群全体の中での今回調査の位置づけ	28
2. 飯氏二塚古墳との関連性	28

挿図目次

Fig. 1 飯氏遺跡周辺図 (1/8,000)	3
Fig. 2 調査区位置図 (1/400)	4
Fig. 3 遺構配置図 (1/100)	5
Fig. 4 調査区東壁・北壁土層図 (1/100)	6
Fig. 5 SC-23出土遺物実測図 (1/4)	6
Fig. 6 SC-23・27・29遺構実測図 (1/60)	7
Fig. 7 SC-27出土遺物実測図 (1/4)	8
Fig. 8 SC-30・32・33遺構実測図 (1/60)	9
Fig. 9 SC-29・30出土遺物実測図 (1/4)	10
Fig. 10 SC-32・33出土遺物実測図 (1/4)	10
Fig. 11 SC-34・35遺構実測図 (1/60)	11
Fig. 12 SC-34・35出土遺物実測図 (1/4)	12
Fig. 13 SC-36・37・38遺構実測図 (1/60)	13
Fig. 14 SC-37出土遺物実測図 (1/4)	14
Fig. 15 SC-39・41・42・43遺構実測図 (1/60)	15
Fig. 16 SC-42出土遺物実測図 (1/4)	15
Fig. 17 SB-46出土遺物実測図 (1/4)	17
Fig. 18 SB-44・45・46遺構実測図 (1/80)	17

Fig.19	SP-129遺構実測図 (1/40).....	17
Fig.20	SK-07遺構実測図 (1/40).....	18
Fig.21	SK-01・02・03・04・05遺構実測図 (1/20).....	19
Fig.22	製鉄関連遺物実測図 1 (1/4).....	20
Fig.23	製鉄関連遺物実測図 2 (1/4).....	21
Fig.24	SX-26遺構・遺物実測図 (1/20・1/4).....	25
Fig.25	SK-08・14・24遺構実測図 (1/40).....	25
Fig.26	各遺構出土遺物実測図 (1/4・1/2).....	26
Fig.27	包含層出土遺物実測図 (1/4・1/2).....	27
Fig.28	各遺構・包含層出土遺物実測図 (1/4).....	27

図版目次

図版 1	(1) 調査区北半全景 (2) 調査区南半全景
図版 2	(1) 調査区北壁土層 (2) 調査区東壁土層 (3) SK-01～05検出状況 (4) SK-01羽口検出状況 (5) SK-07 (西から) (6) SC-23 (南から)
図版 3	(1) SC-27 (北から) (2) SC-35 (南から) (3) SC-36・37 (南から) (4) SC-29・38北半 (西から) (5) SC-33炉検出状況 (北西から) (6) SC-33炉土層断面 (南から)
図版 4	出土遺物

表 目 次

表 1	飯氏遺跡群第8次調査 製鉄関連遺物観察表.....	22
表 2	製鉄関連遺物構成表 1	23
表 3	製鉄関連遺物構成表 2	24

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

1991年（平成3年）10月2日付けで、田中雅夫氏より福岡市西区大字千里字扇子276-4、276-11、279-4地内における個人専用住宅建設とともにうなぎ文化財事前審査願が申請された。これをうけて埋蔵文化財課では申請地が周知の遺跡である飯氏遺跡群の範囲内に位置することから、同年10月11日に試掘調査を実施した。その結果、同地内で弥生時代から古墳時代にかけての柱穴、土坑などを検出し、遺構が申請地全体に遺存していることを確認した。この結果をもとに埋蔵文化財課では関係者と協議を重ねた結果、建物の建築予定部分については建物基礎が遺構面に影響を与えることからこの部分について発掘調査による記録保存を図ることとし、平成3年11月から12月にかけて発掘調査を実施した。

調査は11月6日より南側調査区を先行して重機による表土除去を開始し、11月8日より作業員による遺構検出、遺構掘削を開始し、11月25日、26日に重機による廃土反転、12月11日に北側調査区を埋め戻し、終了した。

発掘調査の実施にあたっては、地権者の田中雅夫氏をはじめ関係者の方々に多大な御理解と御協力をいただきました。ここに記して感謝いたします。

2. 発掘調査の組織

事業主体 田中雅夫

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 埋蔵文化財課 課長 荒巻輝勝（平成3年度調査時）
山崎純男（平成15年度整理・報告時）

庶務担当 埋蔵文化財課 内野保基（平成3年度調査時）
文化財整備課 御手洗清（平成15年度整理・報告時）

事前審査 埋蔵文化財課 松村道博 池田祐司

調査担当 埋蔵文化財課第1係 大塚紀宜（現調査第2係）

調査補助 大塚拓史 永井大志

調査作業 有吉貞江 犬童陽子 小金丸ミネ子 柴田シズノ 末松タツエ 末松美佐子 鶴田善治
黛フギノ 德重コマキ 德重忠子 德重千鶴子 友池富美恵 西田マキエ 間セツ子
波多江喜代子 深見佳子 堀田昭 真鍋キミエ 森友ナカ

整理作業 土斐崎孝子 永利咲江

なお、製鉄関連の遺構・遺物について、大沢正巳（（株）九州テクノリサーチ）、穴沢義功（たたら研究会）の両氏に御指導を頂きました。特に穴沢氏には製鉄関連遺物の分類について有益な情報を多数頂きました。ここに記して感謝致します。

第2章 遺跡の立地と概要

1. 遺跡周辺の地形と環境

飯氏遺跡群は行政区画上、福岡県福岡市西区飯氏・周船寺・千里にかけて所在する。地形的には糸島平野の東部、高祖山の北西麓に位置し、低丘陵とこれにつづく段丘部分から構成される。遺跡群は北・西を瑞梅寺川の支流である周船寺川で区切られ、南側は丘陵から段丘への地形変換線で、東側は周船寺川の支流の谷脇川が形成した谷によって区切られた東西約700m、南北約1kmの範囲に広がり、標高は低地部分で9m、丘陵部分で30m以上にわたる。遺跡群範囲内の丘陵部分には飯氏二塚古墳をはじめとする大小の古墳が分布している。

糸島平野は背振・雷山山系から流れ出す瑞梅寺川、雷山川の両河川とその他の小河川による開拓・堆積作用によって形成された低地・低位段丘によって構成される。糸島平野の歴史環境を概観すると、糸島平野の低地、段丘には縄文時代後期から集落が形成され、三雲遺跡、周船寺遺跡群などで住居跡、埋葬が検出されている。

弥生時代には平野中央部の三雲・井原丘陵で住居、墳墓が検出されており、三雲遺跡南小路地区で検出された甕棺からは多数の青銅器、玉類を主とする副葬品が出土していて、「伊都国」の中心部であったと推定されている。

古墳時代には引き続き三雲・井原丘陵で集落が営まれる他、糸島平野東部から今宿平野にかけて前方後円墳が築造されるようになる。年代的には若八幡古墳が4世紀中頃、丸隈山古墳が5世紀初頭、今宿大塚古墳が6世紀前半、平野中央部の端山古墳が4世紀中頃、築山古墳が4世紀後半とみられている。

奈良時代以降は平野東側に朝廷による対外防衛の拠点的施設として朝鮮式山城である怡土城が築造され、現在も土塁や礎石が遺存している。

飯氏遺跡群ではこれまでに弥生時代の甕棺墓群や集落跡が検出され、甕棺墓群は前期後半から後期にかけて営まれ、後期後半の甕棺墓から雲雷文内行花文鏡が出土している。古墳時代には丘陵上に集落が形成される。

2. 飯氏遺跡群のこれまでの調査概要

飯氏遺跡群は今回報告する8次調査も含め、今まで8回の調査を行っている。

第1次（飯氏馬場遺跡）701207～701229 弥生中期前半の住居跡、弥生前末～後期の甕棺墓等を検出。石棺墓から仿製鏡出土。（「今宿バイパス関係埋蔵文化財報告第2集」福岡県教育委員会 1971）

第2次（飯氏鏡原遺跡）710222～710310 古墳時代の掘立柱建物、平安末の円形周溝墓を検出。（「今宿バイパス関係埋蔵文化財報告第2集」福岡県教育委員会 1971）

第3次

（I区）890515～900110 A区で古墳時代前期初頭～中期初頭の集落を検出。B区で縄文時代晚期の埋葬、弥生中期中頃～後半の甕棺、古墳前期前半の集落を検出。C区で縄文時代の土坑、弥生時代の甕棺、古墳前期の住居跡、中世の土壤墓が検出される。（「国道202号線今宿バイパス関係埋蔵文化財報告IV 飯氏遺跡群1」福岡市埋蔵文化財調査報告書第352集 1993）

（II区）900108～900815 弥生前末～中期初頭の甕棺23基、後期甕棺6基が出土。雲雷文内行花文鏡が副葬品として出土する。（III区）890815～900331 弥生中期中頃～中期後半の甕棺65基を検出する。

（「国道202号線今宿バイパス関係埋蔵文化財報告V 飯氏遺跡群2」福岡市埋蔵文化財調査報告書第390集 1994）

第4次 910203～910331 伊都地区埋蔵文化財試掘調査として実施。飯氏鏡原古墳（仮称）の周溝を検出。埴輪、須恵器破片出土。5世紀中頃か。（「飯氏古墳群B群第14号墳調査報告書（2）」福岡市埋蔵文化財調査報告書第615集 1999に所収）

第5次 930215～930220 中期前半～中頃の甕棺12が出土する。（「国道202号線今宿バイパス関係埋蔵文化財報告V 飯氏遺跡群2」福岡市埋蔵文化財調査報告書第390集 1994に所収）

第6次 951101～960328 純晩期埋甕・壺棺、弥生中期甕棺、古墳時代住居跡などが出土する。（「国道202号線今宿バイパス関係埋蔵文化財報告VI」福岡市埋蔵文化財調査報告書第583集 1998）
(第7次は欠番)

第8次 961106～961211 本書報告分。

第9次 980725～980822 弥生時代中期後半の溝、掘立柱建物等を検出する。（「JR筑肥線複線化地内遺跡埋蔵文化財調査報告書」福岡市埋蔵文化財調査報告書第654集 2000）

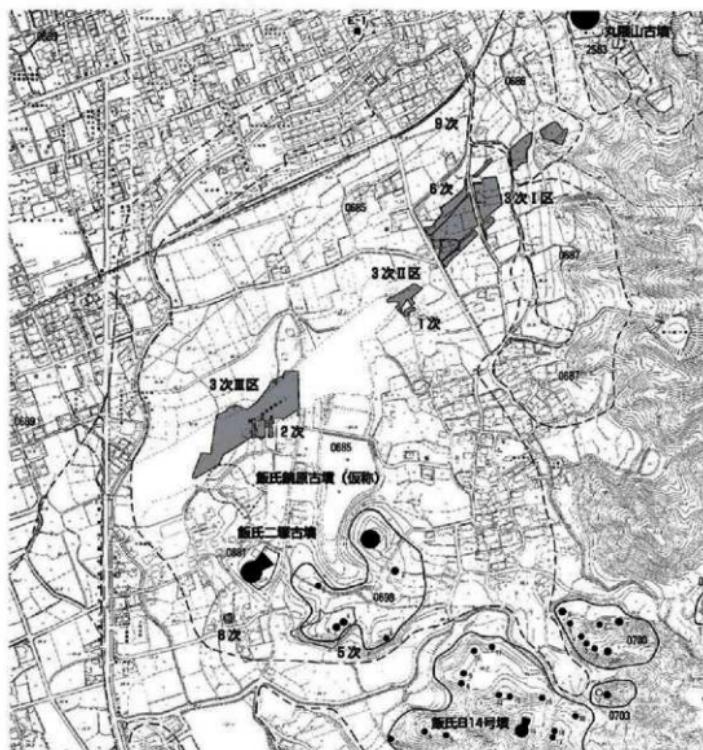


Fig. 1 飯氏遺跡周辺図 (1/8,000)

第3章 調査の記録

1. 調査概要

調査地点は福岡市西区大字千里字扇子276-4、276-11、279-4に位置する。調査面積は308m²である。

現地の基本層序は表土となっている現代の造成盛り土の下層で明褐色粘土(旧水田床土)、薄灰褐色粘土(水田腐)が水平に堆積し、その下層に多量の遺物を包含する灰色砂混じり粘土が堆積する。この包含層は古代の遺構面を挟んで堆積し、地表下約70cmで二次堆積層の黒褐色砂混じり粘土を主とする遺構面に達する。その下層30cmで地山の灰色粗砂層になるが、遺構面以下の層は遺物を包含せず、地山層上面でも遺構は検出されなかった。

調査区全体で弥生時代中期から古代までの遺構・遺物を検出した。弥生時代から古墳時代にかけての遺構は竪穴住居跡14軒をはじめ、土坑、ピットなどである。竪穴住居跡は相互に激しく切り合って個々の住居の遺存状況が悪く、さらに遺構覆土と地山の判別が困難であったために住居構造を確認するのが困難で、検出時に切り合いを認証しているおそれもある。古代の遺構は製鉄炉1基、鍛冶炉5基、掘立柱建物3棟が検出された。

出土遺物は総量で薄型コンテナ40箱相当である。弥生時代中期～後期初頭の土器が多く、弥生中期の土器は近隣から流れ込んだとみられる細片のものが多い。

2. 竪穴住居跡 (SC)

SC-23 (Fig.6) 調査区南西部で検出された竪穴住居で、SC-27より上面で検出される。検出時の平面形は隅丸の正方形で主軸をほぼ南北方向にとり、東西3.4m、南北3.5mを測る。主柱穴は4本とみられ、うち3本を検出する。柱間隔は全て2m前後である。床面はほぼ平坦で西側にごく緩く傾斜する。北側周壁のほぼ中央位置に外側に突出する部分があり、窓の可能性もあるが、周囲から粘土、焼土など関連する遺物は出土していない。他の住居跡よりも

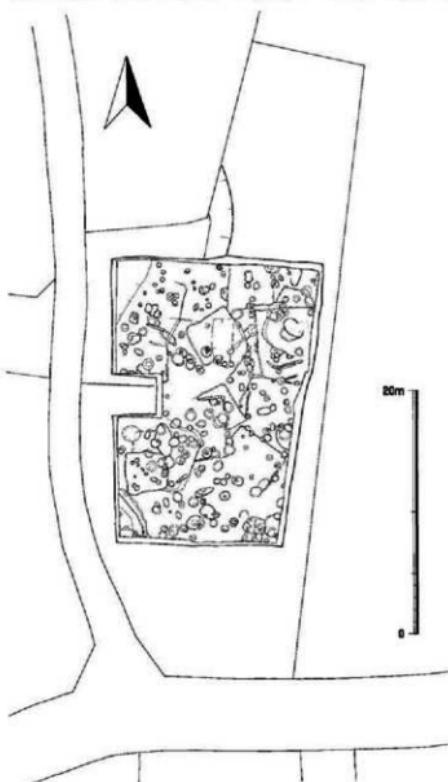


Fig. 2 調査区位置図 (1/400)

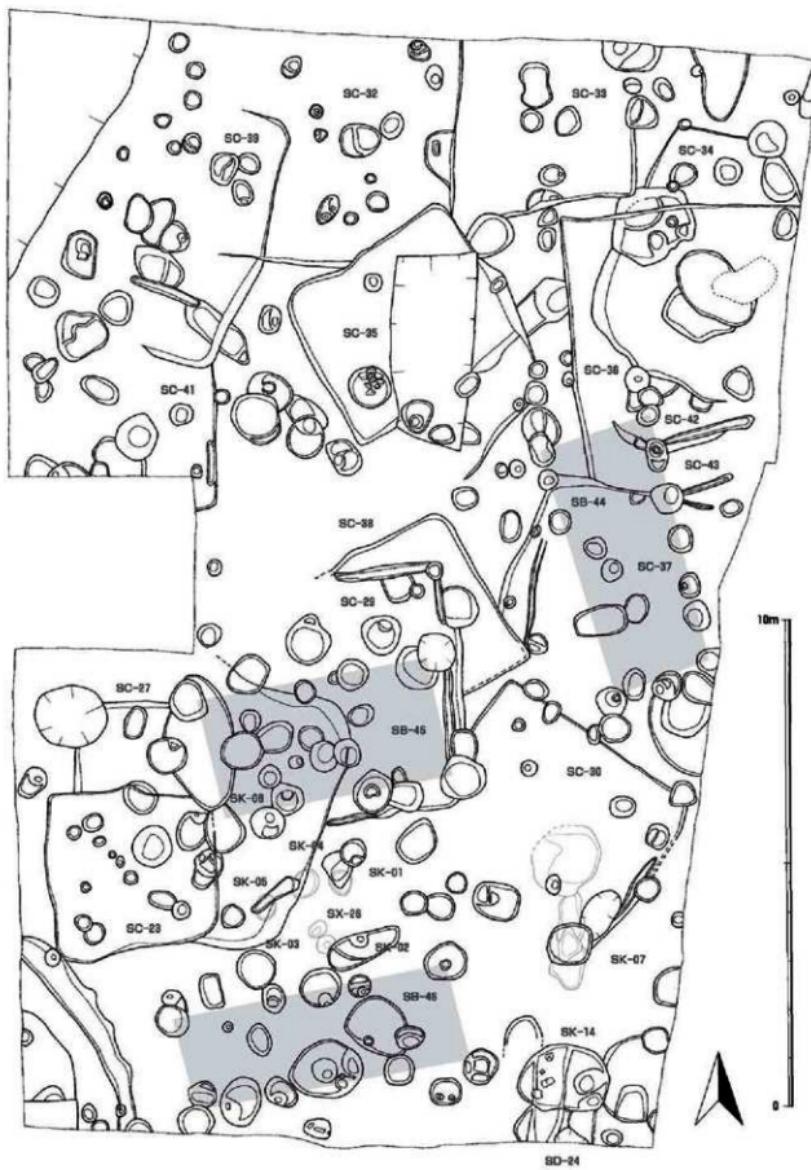
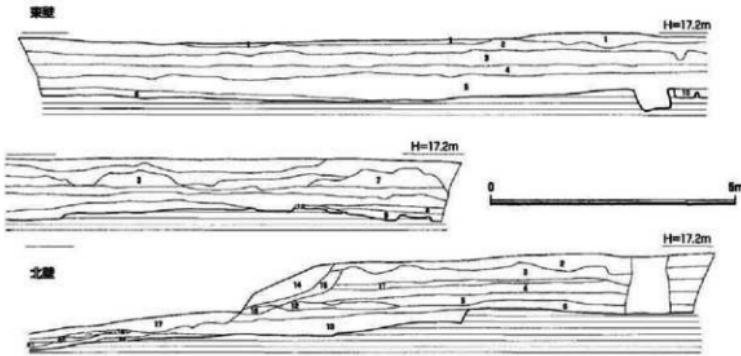


Fig.3 遺構配置図 (1/100)



1.薄暗褐色土 2.薄灰褐色土 3.薄褐褐色土 4.暗褐褐色 5.灰色土 6.暗褐色土 7.明褐色土
 8.薄灰色土 9.灰色土 10.黑褐色土 11.暗褐色土 12.黑褐色土 13.黑褐色土 14.暗褐色土 15.暗褐色土
 16.暗褐色土 17.明褐色土 18.灰褐色土 19.暗赤褐色土 20.暗褐色土 21.暗褐色土 22.灰色土

Fig.4 調査区東壁・北壁土層図 (1/100)

一回り小型で遺存状況もわることからベッド状遺構をもつ竪穴住居のベッド上面以下まで削平された遺構とも考えられる。

出土遺物 (Fig.5) 1、2は弥生中期後半の甕口縁部で、この時期の遺物は他の遺構内や包含層からも小片として大量に出土する。遺構の時期に関わるものではないが参考として図示する。3は弥生中期末の甕口縁部で、口縁端部に粘土を繼いだ痕跡が明瞭に残る。4は弥生時代後期の甕でやや小型。外面屈曲部に板状工具による成形痕が残る。5は弥生時代中期末の袋口縁壺頭部。口縁直下に宽带をもち、外面に丹塗り痕が残る。6は弥生中期の甕底部で7は同時期壺底部。8～10は土師器鉢でいずれも風化著しい。9は高杯環部の様相もみせる。11、12は土師器丸底壺の口縁部。11はやや肉厚の口縁部で口縁端部は丸め、12は口縁端部を面取りする。11、12とも外面は横ナデ、内面は横方向ハケメ。13は須恵器环蓋。14は須恵器环身で、後世の混入とみられる。低い高台を貼付し、一部砂が付着する。胴部は内外面とも回転横ナデ。15は土師質の土製品。略紡錘形または略球形で上下両側から

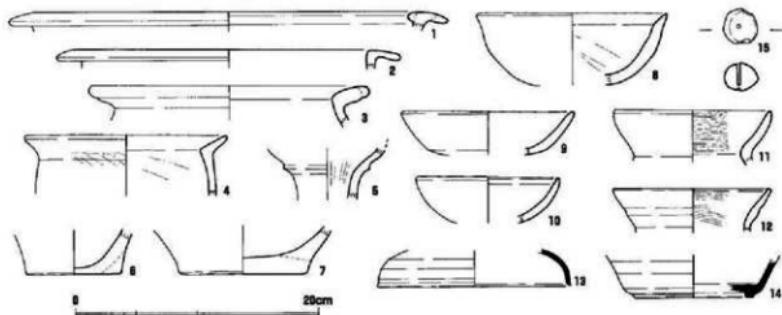


Fig.5 SC-23出土遺物実測図 (1/4)

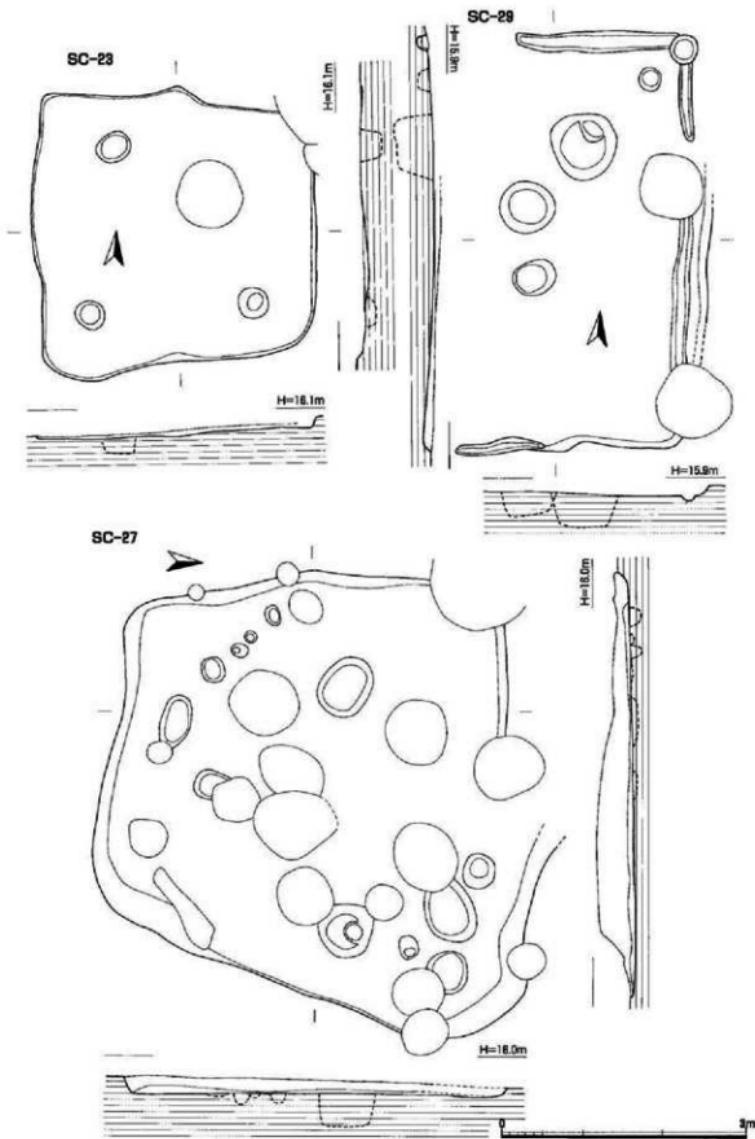


Fig.6 SC-23・27・29造構実測図 (1/60)

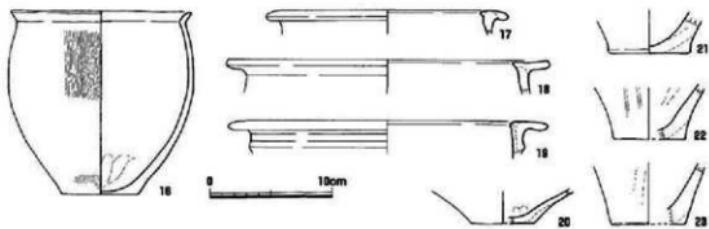


Fig.7 SC-27出土遺物実測図 (1/4)

穿孔されるが貫通しない。

出土遺物から見て、造構の時期は古墳時代前期～中期に属するとみられる。

SC-27 (Fig.6) SC-23よりも検出面レベルで20cm、床面レベルで30cm下位に位置する。平面形は隅丸台形で北側の一部で外形を見失う。平面形は少し歪むが検出面レベル、床面レベルが整うため単一造構として扱う。2基の住居の可能性も捨てきれない。西側壁長4.6m、南側壁長3.6m、東側壁長5.0mで検出時の造構の深さは20～50cmである。造構内部は住居検出レベルより上位で検出された柱穴により遺存状況は良くない。床面はほぼ平面で傾斜はなく、床面上で検出された柱穴のうち主柱穴と確定できるものはない。床面上に炉などの構造物や焼土、炭などは検出されなかった。

出土遺物 (Fig.7) 16は弥生時代後期前半の小型の甕形土器で、ほぼ完形分の破片が出土した。口縁部はく字形に外反して短く、胴部は丸く張り出して底部は平底である。外面は縦方向ハケメ、内面はナデで底部付近に指圧痕が残る。17～23は弥生中期後半の土器でいずれも小片である。17～19は甕口縁部。いずれも外側に長く張り出したL字形で19は口縁下に突帯を持つのが確認できる。20は甕形土器底部と見られる。平底の底部から胴部は大きく広がって張り出すものとみられる。外面は丹塗りで内面にも顔料が付着する。21～23は甕形土器底部で、いずれも平底の底部をもつ。いずれも風化著しいが、22、23は外面にハケメまたは板状工具痕が残る。

造構の時期は16の時期に該当すると考えられ、弥生後期前半に属する。

SC-29 (Fig.6) 調査区中央部分で検出された住居跡で、廃土反転による調査区分割の境界をまたいでいるために造構検出レベルが若干ずれ、北側は床面レベルで検出するために壁溝と柱穴のみ検出できた。住居全体の平面形は方形とみられるが、住居西側部分は削平されて検出できなかった。南北幅は5.1mで北、東、南の各壁溝は直線的ではなく直角に接する。住居の南東側部分では高さ10cm程度の壁の立ち上がりが見られ、東壁部分では壁溝から10cmの間隔をおいて壁が立ち上がるが、南壁部分では壁と壁溝の間に隙間はない。壁溝は幅20～30cm、深さ5～10cmで、壁溝床面のレベルは全体に同じである。床面は平坦で南側に若干傾斜する。床面上で検出された柱穴のうち主柱穴と確定できるものはない。

出土遺物 (Fig.9) 造構内や壁溝内から土器破片が出土したが、いずれも小片で図示できるものは少ない。24は弥生中期後半の甕口縁部。口縁はL字形でやや太めに突出する。外面はハケメ、内面はナデ。25は甕底部。平底で、風化のため内外面の調整不明。弥生中期の遺物である。

造構の時期は遺物内容およびSC-29の西側部分がSC-27覆土上面で検出できなかつたことからSC-27に先行するものとみられる。弥生時代中期後半から後期前半の範疇で考えたい。

SC-30 (Fig.8) 調査区南東側で検出された竪穴住居で、南西側は造構境界が不明瞭で検出できなかつ

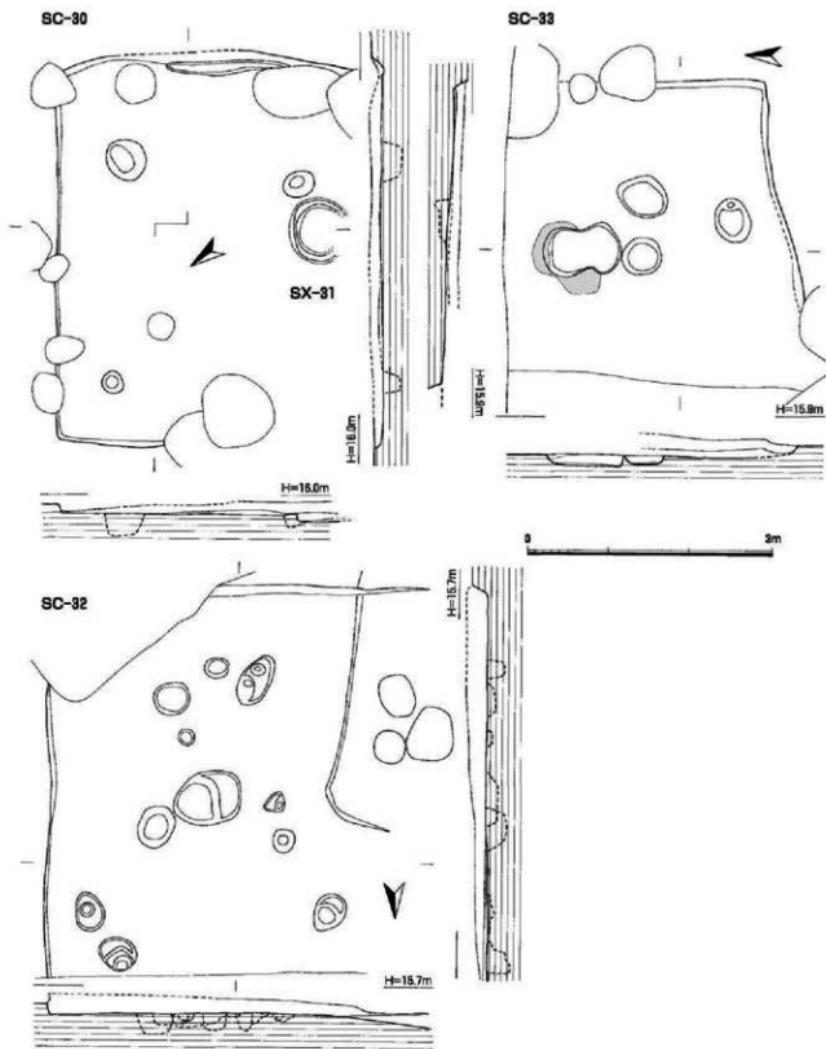


Fig.8 SC-30・32・33造構実測図 (1/60)

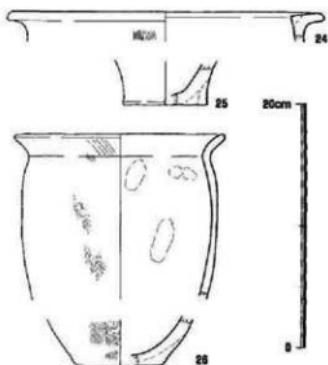


Fig.9 SC-29・30出土遺物実測図 (1/4)

た。住居全体の形は長方形と考えられ、北西—南東方向の幅4.8m、南北幅は主柱穴と壁との間隔から3.8m前後と推定される。北東壁、北西壁は直線的で、南東壁は外側に緩く張り出す。壁溝は南東壁のみで確認でき、幅15cm、深さ4cm程度で壁に接している。床面はほぼ平坦である。床面上で検出された柱穴は建物の主柱穴の可能性が高い。柱穴径は25~50cm、床面からの深さは17~27cmを測る。検出部分の南西部分で炉址とみられる円形の遺構を確認した(SX-31)。炉址は南西側を柱穴によって失っているが、外径80cmの円形土坑で、外周部分に灰白色粘土を高さ2、3cmの輪状に積み、内部を10cm程度掘り下げている。炉内覆土は炭化物を多く含むが粘土や炉壁、炉床に強く被熱した箇所は見られない。炉址は位置的に住居中央からは外れ、さらに主柱穴と見られるうちの1本に近接することから、検出できなかつた他の住居のものかあるいは主柱穴の仮定が誤りであるとも考えられるが、ここではSC-30に伴うものと考える。

出土遺物(Fig.9) 遺構内からの遺物は小片が多く図示できるものは少ない。26は弥生後期前半の瓶形土器で、胴部以上と底部は接合しないが同一個体とみられるものである。口縁はく字に緩く外反し、胴部は縱に長い。器面調整は外面は縱方向ハケメで一部ナデ消し、内面はナデ、口縁部外面は板ナデ状の粗いハケメ。

遺構時期は26の時期から弥生時代後期中頃と考えられる。

SC-32 (Fig.8) 調査区北側部分で検出された堅穴住居址で、住居北側部分は調査区外に及び、西側は削平されていたために住居の南東側しか確認できていない。住居全体の形態は方形または長方形と考えられる。住居の大きさは南北方向4.6m以上、東西方向で5.0m以上としておく。南壁、東壁とも平面形は直線的で、隅角も丸みを帯びず明瞭なものと考えられる。床面はほぼ水平だが西側は削平のため緩く傾斜している。床面で検出されたピットのうち、主柱穴と確認できるものはない。床面上で炉址、壁溝などの施設は検出されていない。

出土遺物(Fig.10) 27は土師器の壺で、やや短めの口縁が直立し、胴部は緩く張り出す。外面全体に縦方向のハケメ、内面は口縁部に右上方向のハケメ、胴部は横方向のハケメが粗く施される。28は土師器小型鉢。全体に半球形を呈し、底部は丸底で器壁は薄い。外面はナデ、内面もナデで、底

た。住居全体の形は長方形と考えられ、北西—南東方向の幅4.8m、南北幅は主柱穴と壁との間隔から3.8m前後と推定される。北東壁、北西壁は直線的で、南東壁は外側に緩く張り出す。壁溝は南東壁のみで確認でき、幅15cm、深さ4cm程度で壁に接している。床面はほぼ平坦である。床面上で検出された柱穴は建物の主柱穴の可能性が高い。柱穴径は25~50cm、床面からの深さは17~27cmを測る。検出部分の南西部分で炉址とみられる円形の遺構を確認した(SX-31)。炉址は南西側を柱穴によって失っているが、外径80cmの円形土坑で、外周部分に灰白色粘土を高さ2、3cmの輪状に積み、内部を10cm程度掘り下げている。炉内覆土は炭化物を多く含むが粘土や炉壁、炉床に強く被熱した箇所は見られない。炉址は位置的に住居中央からは外れ、さらに主柱穴と見られるうちの1本に近接することから、検出できなかつた他の住居のものかあるいは主柱穴の仮定が誤りであるとも考えられるが、ここではSC-30に伴うものと考える。

られるうちの1本に近接することから、検出できなかつた他の住居のものかあるいは主柱穴の仮定が誤りであるとも考えられるが、ここではSC-30に伴うものと考える。

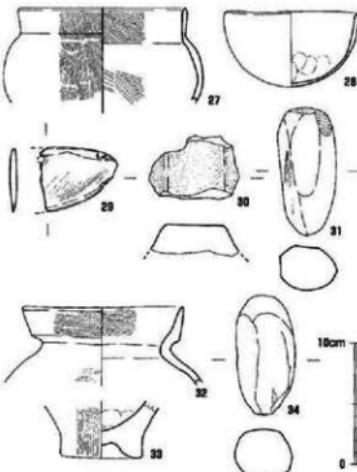


Fig.10 SC-32・33出土遺物実測図 (1/4)

部に指圧痕が残る。29は石包丁破片。粘板岩製で半梢円形を呈する。30は磁石。砂岩製で残存する3面全てに研磨痕がある。被熱した痕跡はない。31は磁石で、円礫を磁石として使用しており、3面の研磨面がある。石材はチャート質である。

遺構の時期は古墳時代前期と考えられる。

SC-33 (Fig.8) 調査区北側で検出された遺構で、北側部分は調査区外に及び、西側はSC-32に切られるなど遺構の遺存状況は悪く、住居の南東隅部分のみ検出する。したがって住居規模は不明で、柱穴等からの推測も困難である。平面形は方形あるいは長方形になるとみられ、東壁、南壁とも直線的で互いにやや開き気味に接する。隅角の屈曲部は明瞭である。床面は西側に緩く傾斜する。床面上でピットを検出したが、主柱穴と確定できるものはない。また床面上から炉址が検出されている。炉址の平面形は径60cm、深さ12cmの円形土坑を2つ連結させた達磨形で、炉壁のうち北側と西側で強く被熱して赤変、硬化した焼土部分が検出された。炉壁に粘土などを貼り付けた状態は確認できず、地山が直接熱を受けている。炉内は炭化物と焼土で充填されていて他の土砂の流入は少なく、南北2つの円形遺構の切り合いも認められない。炉内からの遺物の出土はない。

出土遺物 (Fig.10) 遺構内から出土した遺物は小片が主で、図示できるものは少ない。32は土師器壺の頸部で、大型の破片で出土する。頸部は屈曲して短く外反し、口縁部は頸部から緩く屈曲して立ち上がる。器壁が厚く屈曲度合いも純いなど在地的な様相を示す。

33は弥生時代中期前半の壺形土器底部。

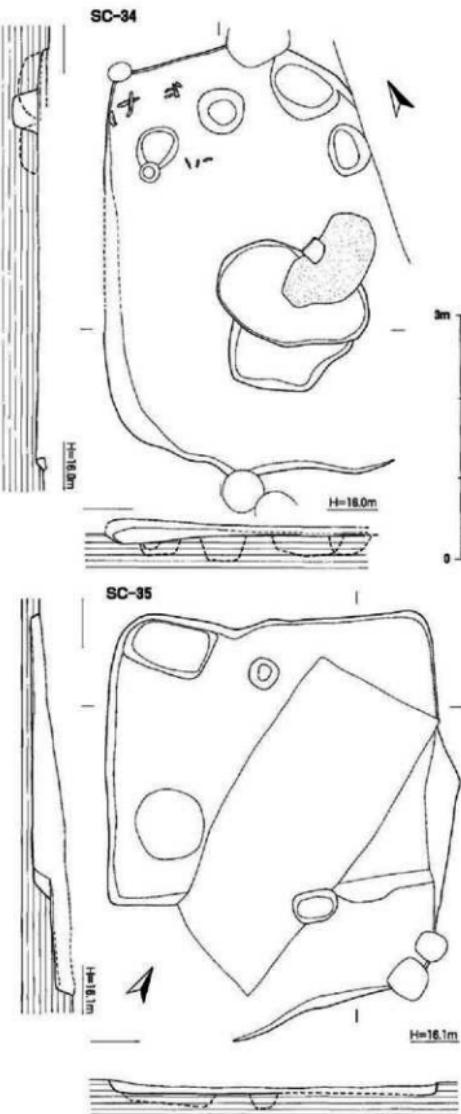


Fig.11 SC-34・35遺構実測図 (1/60)

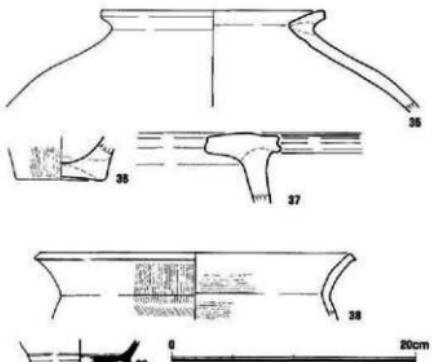


Fig.12 SC-34・35出土遺物実測図 (1/4)

など形態的には整っていない。南北方向の幅は5.2mを測る。床面は平面で南西側がやや低いほかはレベルも一定である。床面で検出されたピットのなかで建物の主柱穴と確定できるものはなく、軒などの施設もないため、住居構造は明らかでない。

出土遺物(Fig.12)35は短頭壺で、口縁部は短く外反し、口縁端部は横ナデにより面取りする。胴部は外側に強く張り出す。胴部器面は内外面ともナデ。弥生中期末～後期初頭に属する。36は甕形土器底部。外面は縦方向ハケメ、内面はナデ。37は甕棺口縁部の破片で、汲田式あるいは須式とみられる。口縁部はT字形で内側に大きく太く張り出し、外側には内側よりも小さく張り出す。口縁部上面は水平あるいはやや外傾するとみられる。弥生時代中期前半～中頃のものであるが、調査区内には他に甕棺遺構や破片ではなく、おそらく調査区の東側の高所から流れ込んできたものであろう。本次調査地点の南東側に位置する第6次調査で弥生時代中期の甕棺墓群を検出し、飯氏二塚古墳の墳丘中にも甕棺を検出しているが、この6次調査地点を含め本次調査の東側丘陵に弥生時代中期を主とする甕棺墓群が広がっている可能性が高い。

遺構の時期は弥生時代中期～後期初頭と考えられる。

SC-35 (Fig.11) 調査区北側で検出した竪穴住居址で、遺構中央部は攢乱により破壊される。検出時の平面形は隅丸長方形で、南北幅は約5m、東西幅4.2mを測る。南東側が一段高く、ベッド状の削り出しがみられるが、南側部分は削平されている。遺構規模からみて、このベッド状遺構は他の側にも本来存在していたが、削平されて遺存していない可能性が高い。周壁はやや蛇行気味に伸び、隅角はかなり丸みを帯び屈曲部は明瞭でない。床面はほぼ水平で、ベッド状遺構も上面はほぼ平坦である。床面とベッド状遺構の高低差は20cmである。床面上で検出したピットのうち、北側中央部で検出したピットは主柱穴になる可能性があり、その場合主柱穴は全体で2本柱になるとみられる。

出土遺物(Fig.12)38は甕口縁部で、弥生時代後期のものである。口縁は外反し、口縁端部は面取りされて外側に短く張り出す。外面は縦方向ハケメ、内面は横方向ハケメ。39は須恵器身底部。高台は外側に開き気味に広がる。奈良時代のものとみられ、混入と考えられる。

遺構の時期は弥生時代末～古墳時代初頭と見られる。

SC-36 (Fig.13) 調査区東側で検出した竪穴住居址で、遺構東側は調査区外に及び、南側はSC-37に

明瞭な上げ底になっていて他の弥生時代の遺物よりも古相を示す。遺構の年代には直接つながらないが弥生中期前半の跡が東側丘陵に存在する可能性を示すものとして図示する。34は叩石とみられる。楕円形の石材の片方に叩打痕とみられる平坦面が形成される。側面には研磨面に似た平滑面があり、砥石として使用された可能性もある。遺構の時期は古墳時代前期と考える。

SC-34 (Fig.11) 調査区北東部分で検出された竪穴住居址で、住居西側部分は調査区外に及ぶ。また南側半分はSC-36に切られる。平面形は隅丸長方形と見られ、北東側の壁が内側に入り込む。西壁も直線的でなく若干蛇行気味で、南壁も外側に湾曲する

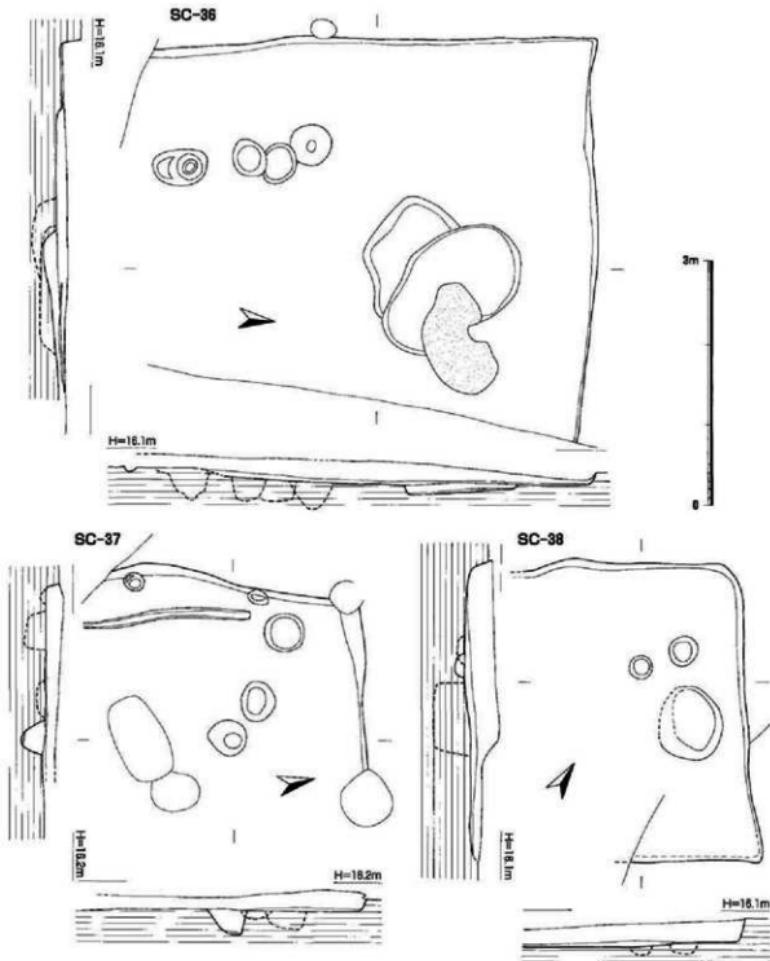


Fig.13 SC-36・37・38造構実測図 (1/60)

及ぶ。平面形は方形あるいは長方形を呈するとみられる。北壁、西壁は直線的で、北東隅は強く屈曲する。床面はほぼ平坦とみられるが、床面の一部は下層のSC-34の覆土と混同して掘り下げすぎたおそれがある。検出した造構範囲の北側で炭化物が集中する範囲を確認する。炭化物は長さ1.4m、幅80cmの楕円形に広がっており、1～2cmの厚さで堆積する。炭化物は細かく砕けており、焼土塊を

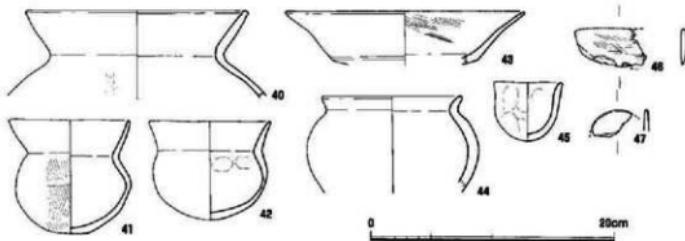


Fig.14 SC-37出土遺物実測図 (1/4)

巻き込んで薄く広がっており、木材など形状の明瞭なものはない。この焼土層範囲の下に土坑が2基切り合っているが、この土坑覆土内に炭化物は全く含まれず、土坑埋没後に炭化物が堆積した状況を見せている。位置的に住居の端に近い部分にあり、平面的に薄く広がることから、この炭化物の性格について炉址などの可能性は低いと考えられる。床面には他に柱穴が検出されたが、主柱穴と確定できるものはない。

出土遺物 遺構内からの出土遺物はいずれも細片で図示できるものはない。土師器、弥生土器を確認しているが、遺物の詳細な時期は不明である。

遺構の時期はSC-34以降、SC-37以前という時期で考えると弥生時代後期頃とみられる。

SC-37 (Fig.13) 調査区東側で検出された竪穴住居址である。遺構東側は遺構境界が不明瞭で検出できず、南側はSC-38に切られ、検出できた範囲は住居の北西側部分のみである。遺構平面形は長方形または方形で、隅角は強く屈曲していたとみられる。床面上で3基のピットを検出しておらず、いずれかが主柱穴にあたるものとみられる。住居内西側部分で南北方向に延びる壁溝状の溝が位置するが、壁からかなり離れており方向もずれることから、この住居には伴わない溝と考えられる。すなわち、この溝を伴う住居がさらに存在する可能性が高い。

出土遺物 (Fig.14) 40は土師器甕口縁部。口縁は外側に開きながらごくわずかに内湾し、口縁端部は明瞭に面取して口唇部は内側に小さく稜をつくる。外面は横ナデ、胴部に縱方向ハケメを確認できる。41、42は小型丸底甕で、41は内湾しながら立ち上がる口縁部に球形の胴部をもつ。胴部外面は縱方向ハケメ。42は広口の口縁にやや短い球形の胴部がつく。43は高杯環部で、環部下半と上半の境界で屈曲し、外面に段を形成する。環部上半は緩く外反しながら開く。外面はナデ、内面は横方向ハケメ。44は短頸甕で、短く外反する口縁部と球形の胴部がつく。45は手捏ね土器。端部はわずかに外反し、底部は丸底で自立しない。内外面に指圧痕残る。46は石包丁で安山岩製である。弥生時代中期以前の遺物で流れ込みとみられる。47は紡錘車破片とみられる。花崗岩製で全体に研磨され、復元径は4.6cm程と考えられる。

遺構の年代は古墳時代前半～中頃と考えられる。

SC-38 (Fig.13) 調査区中央部で検出された竪穴住居址で、遺構南側の大半部分をSC-30に切られる。遺構規模は北西～南東方向幅3.5mで、平面形は隅丸の長方形または方形とみられ、壁は直線的に延び、隅角はやや丸みを帯びるため屈曲は強くない。検出面から床面までの高さは20～30cmで、壁は床面からやや開き気味に立ち上がる。床面には若干の凹凸が見られる。床面上でピットを検出し、主柱穴の可能性もあるがSC-30の遺構範囲と重複するため、いずれの遺構に属するものか不明である。

出土遺物 遺構内からの出土遺物は少なく、図示できるものはない。

遺構の時期は切り合ひ関係からみてSC-29以前、SC-37以降の時期であるため、弥生時代末～古墳時代前半の時期と考えられる。

SC-39 (Fig.15) 調査区北西部分で検出された堅穴住居址で、北東側でSC-32に切られ、南側でSC-41を切り、西側は削平されている。遺構検出時には造成による段差と誤認し、SC-32掘削時に床面から遺構北半分が検出された段階で住居址と気づいたため遺構内の精査や遺物確認の点で不十分な点が生じた。遺構平面形は隅丸長方形で、東壁は中央部で若干外側に張り出す。南北方向の幅は5.6mである。壁の立ち上

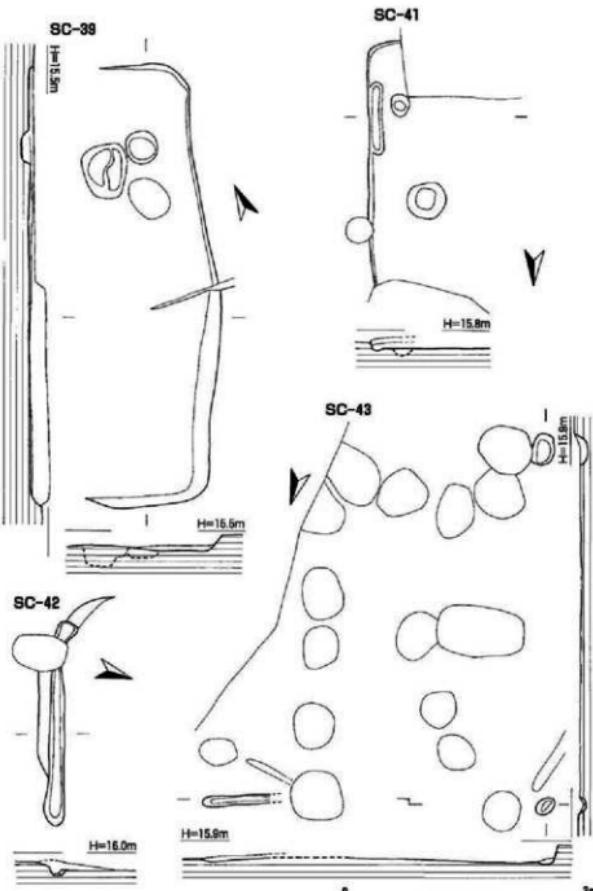


Fig.15 SC-39・41・42・43遺構実測図 (1/60)

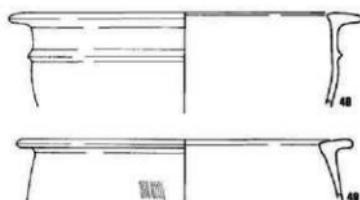


Fig.16 SC-42出土遺物実測図 (1/4)

がりは東壁、南壁で見る限り緩く開いて立ち上がる。床面はほぼ平坦だが東側壁際がわずかに深くなる。床面で検出された柱穴のうち主柱穴と確認できるものはない。

出土遺物は前述したようにSC-39固有のものとして取り上げたものはない。

遺構の時期は切り合い関係からSC-32以前、SC-41以降である。古墳時代前期～古墳時代中期の幅の中で考えたい。

SC-41 (Fig.15) 調査区中央西側で検出した堅穴住居址で、遺構南側は調査区外に及び、北側はSC-39に切られ、西側は削平されて遺存しない。遺構境界で確認できるのは南東部分のみである。住居平面形は隅丸方形と考えられ、主軸をほぼ南北方向にとる。南東隅角はやや丸みを持つ。壁の残りは悪く、床面から10cm以下の高さしか遺存しない。南東側の壁際に一部壁溝とみられる溝状遺構が検出されており、長さ90cm、幅18cm、深さ2cmを測る。遺構床面は検出部分ではほぼ平坦で、北に緩く傾斜する。床面上で検出された柱穴のうち主柱穴とみられるものは確定できない。

遺構内から出土した遺物は少なく、弥生土器、土師器の小片のほか、須恵器壺胴部小片が出土している。図示できないが、器面調整は外面が平行タタキ、内面はケズリである。

遺構の時期は須恵器破片の時期から古墳時代中期頃とみられる。

SC-42 (Fig.15) SC-36の遺構床面レベルで検出する。遺構全体が大きく削平され、住居南西角のみ遺存する。隅角は丸みをもち、南壁は直線的に延びるものとみられる。壁際に壁溝が延び、長さ2.5m、幅20cmを測る。床面の詳細な状況は不明で、住居に伴う柱穴にはSC-36遺構内で検出されている柱穴のいずれかが該当する可能性がある。

出土遺物 (Fig.16) 遺構内からの遺物は弥生土器が大半を占め、須恵器壺が1点みられるが小片で図示できない。48～51は弥生中期後半の壺形土器。48は逆L字形で外側に長く突き出す口縁部をもち、口縁直下に断面三角形突帯をもつ。内外ともナデ調整。49は口縁形が逆L字形でやや上方に突き出す。外面は継ハケメ、内面はナデ。50は壺形土器底部。平底で外面は継ハケメ、内面はナデ。51は壺形土器底部。上げ底で外面は継ハケメ、内面はナデ。

遺構の時期は弥生時代中期後半と見られる。須恵器破片は後世の混入と考えられる。

SC-43 (Fig.15) 調査区東側で検出した住居址とみられる遺構群で、壁溝とみられる溝と2基の柱穴からなる。調査時には住居として認識できず、調査後に遺構の配置状況を確認した際に住居跡の可能性が浮上したため、ここで提示する。壁溝は幅12cm、深さ5cmで直線的に延びる。検出できた長さは1.1m程である。柱穴のうち北側の1基は径20cm、検出面からの深さ5cmで、壁溝の延長線上に位置する。もう1基の柱穴は径30～40cm、検出面からの深さは6cmである。この2基の柱穴をもとにして住居規模を復元すると一辺の長さが4.5m前後の方形プランが想定できる。

この3基の溝、柱穴からの出土遺物はなく、時期を特定する直接の手がかりはない。検出段階でみられた状況からSC-37より古く、SC-30より新しいものになるとを考えられる。すなわち弥生時代後期後半頃に推定される。

3. 掘立柱建物 (SB)

調査区内で多数の柱穴を確認し、そのなかで3棟の掘立柱建物を確認した。柱穴数からみて調査区内にはさらに多くの建物が存在したものと考えられる。

SB-44 (Fig.18) 調査区東側で検出した建物で、梁行1間、桁行3間の建物である。主軸は略南北方向にとり、梁行1.7～1.9m、桁行5.2mを測る。桁行方向の柱間隔は2.2～2.4mで、検出面からの柱穴の深さは20～60cmで幅がある。全体に削平を受けていると見られ、柱穴のなかには検出時で既にごく浅いものもある。柱穴の掘り方は円形のものが多く、略長方形の掘り方をもつ柱穴もある。柱穴掘り方の径は40～60cm程である。柱痕跡が残る柱穴は2基あり、痕跡径は15～20cmほどで細めである。

各柱穴からの出土遺物は小片で図示できるものはない。遺物の種類は弥生土器、土師器、須恵器が

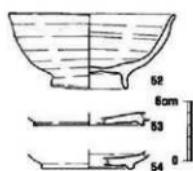


Fig.17 SB-46出土遺物実測図(1/4)

含まれ、弥生土器の数量が圧倒的に多いがいずれも小片で摩滅している。

SB-45 (Fig.18) 調査区南側で検出した建物で、梁行1間、桁行2間の建物として検出したが、桁行方向で柱間の間隔が広い部分があり、本来は梁行1間、桁行3間であったものが削平により失われた可能性がある。建物規模は梁行2.8m、桁行5.2m 主軸方向は略東西方向で、SB-44主軸の直交方向に近い方向をとる。桁行方向の柱間隔は1.8~3.4m。検出面からの柱穴の深さは5~45cmで幅があり、特に南西隅の柱穴の削平度合いが著しい。柱穴の掘り方は円形で、掘り方の径は70~80cmである。柱痕跡が残る柱穴は1基あり、柱痕跡径は30cmである。

各柱穴からの出土遺物は小片

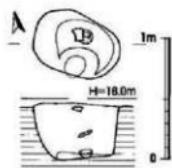


Fig.19 SP-129遺構実測図(1/40)

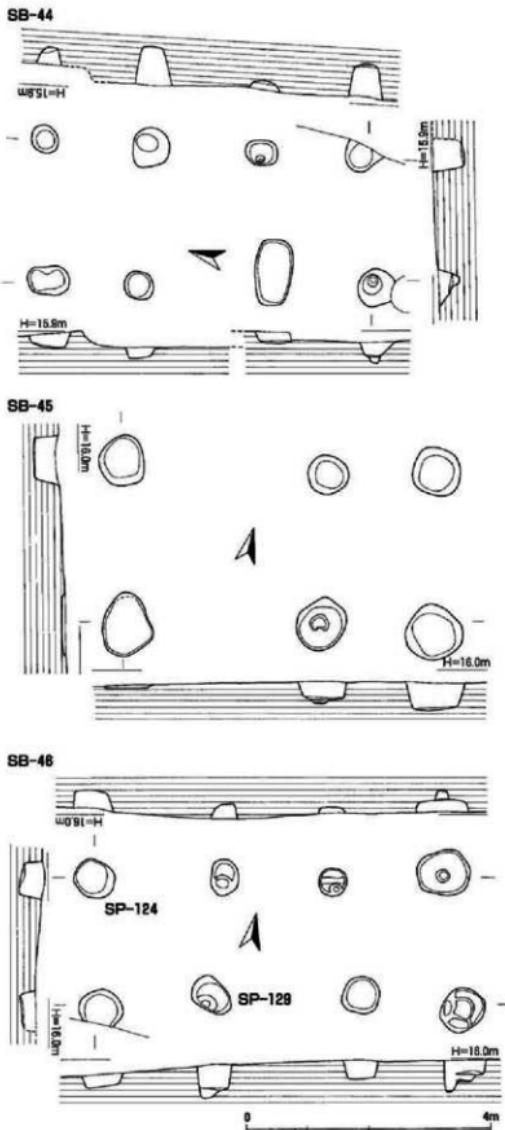


Fig.18 SB-44・45・46遺構実測図(1/80)

で図示できるものはない。遺物の種類は弥生土器、土師器、須恵器が含まれる。

SB-46 (Fig.18) 調査区南側で検出した建物で、梁行1間、桁行3間の建物である。建物主軸は略東西方向で、SB-45の建物主軸とほとんど平行である。SB-45との間隔は約3mある。建物規模は梁行2.2m、桁行5.8mを測る。桁行方向の柱間隔は1.5~2.5mでばらつきがあり、特に南側桁行の中央柱間が広くなっている。また柱の並びは南側桁行きの柱の内側2本がやや内側に入っている。検出面からの柱穴の深さは30~50cmで若干幅がある。柱穴掘り方は円形か梢円形を呈し、掘り方径は50~90cmで、建物両側の柱穴掘り方が比較的大きく内側が小さい傾向が見られる。柱痕跡が残る柱穴は5基あり、柱痕跡は20~30cmである。柱穴のうち南側桁行のSP-129からは高台付环が柱穴床面直上から完形で出土した。(Fig.19) 柱穴位置から外れた位置で検出されており、建物建築時に供献されたものであろう。

出土遺物 (Fig.17) 各柱穴から出土した遺物には弥生土器、土師器、須恵器がある。弥生土器はいずれも小片で図示できない。土師器・須恵器のうち以下の3点を図示する。52は前述のSP-129出土の土師器高台付环で、高台は高く直立し、環部は丸く立ち上がり、口縁部で軽く外反する。環部内外面は回転横ナデ、高台部はナデ成形。53・54は須恵器環の底部。53はSP-124出土で高台が太く短く直立し、54はSP-129出土で太く短い高台が外側に張る。いずれも8世紀後半~末のものと考えられる。

4. 製鉄・鍛冶関連遺構

調査区内で5基の鍛冶炉と1基の製鉄炉を検出した。鍛冶炉は調査区南側中央付近に集中しており、製鉄炉は鍛冶炉集中部分の東側に隣接して位置している。

SK-01 (Fig.21) 鍛冶炉とみられる遺構である。平面形はほぼ円形で、床面は平坦で略円筒状を呈する。東側の壁面に焼土・鉄滓が集中し、強く被熱した部分がある。床面に強く被熱した痕跡はない。覆土は黒褐色砂質土で炭化物、鉄滓を多量に含む。遺構北東側の検出面付近で羽口が出土しているが、検出位置や傾きからみて原位置ではないとみられる。

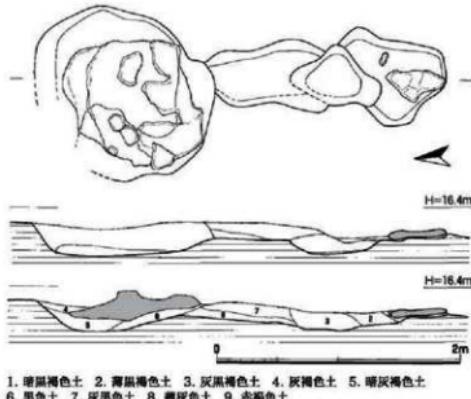


Fig.20 SK-07遺構実測図 (1/40)

SK-02 (Fig.21) 鍛冶炉とみられる遺構で、平面形は円形で、浅い皿状の形態をとる。壁や床面は強く被熱して焼土層を形成し、覆土中に焼土や炭化物を多く含む。

SK-03 (Fig.21) 鍛冶炉とみられる遺構で、平面形は梢円形を呈し、中軸線を北東~南西方向にとる。床面は平坦で断面形は台形を呈するが、土層の堆積状況からみて下層は操業時に埋没していたとみられ、操業時には浅い皿状であったと考えられる。壁面は強く被熱し、堅く焼けているが、床面に強く被熱した箇所はない。覆土中に焼土、炭化物を多く含む。

SK-04 (Fig.21) 平面形は梢円形を呈し、中軸線を北東~南西方向にと

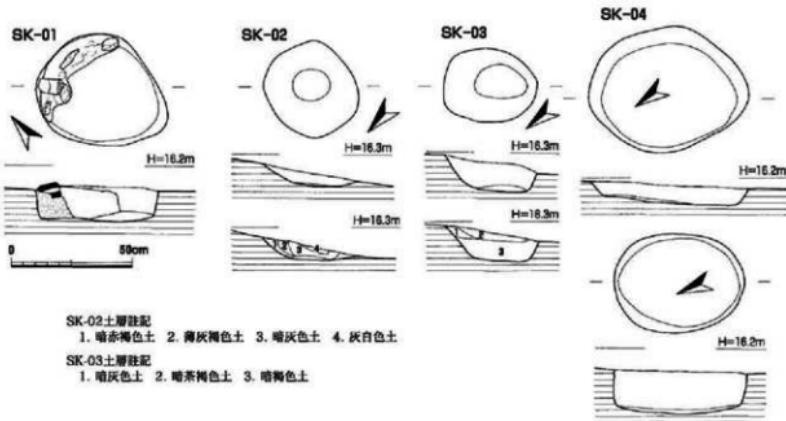


Fig.21 SK-01 • 02 • 03 • 04 • 05遺構実測図 (1/20)

る。浅い盤状で、床面は平坦面を呈する。覆土は灰白色粘土混じりの暗茶褐色砂質土の単一層で、壁面、床面に被熱した箇所はないが、覆土中に焼土、炭化物、鉄滓を含むため、鍛冶炉と考えられる。

SK-05 (Fig.21) 平面形は梢円形を呈し、中軸線をほぼ南北方向にとる。壁面は直立し、床面は平坦で全体的に円筒形を呈する。覆土は灰白色粘土混じりの黒灰褐色砂質土で、壁や床面に強く被熱した箇所はないが、炭化物や鉄滓を多く含み、鍛冶炉と考えられる。

SK-07 (Fig.20) 調査区南東側で検出された製鉄炉である。遺構は中央部の炉床部分を挟んで南北に排滓坑が接続する構造になっている。遺構全体の中軸線はほぼ南北方向で、丘陵全体の地形からみると中軸線は等高線に平行になるが、操業当時は既に周辺はテラス状に造成されていたとみられる。中央の炉床部は幅50cm 長さ90cmで、床面付近は被熱せず、覆土は鉄滓、炭化物を多く含む。北側排滓坑は平面形は円形で南側排滓坑より大きく、出土した鉄滓の量も南側より多い。覆土は灰黒色粘土を主とし、鉄滓や大量の炉壁焼土塊を含む。南側排滓坑は二段掘り状になり、一段深い部分が本来の排滓坑と見られる。覆土は黒褐色土を主とし、鉄滓や炉壁焼土塊を含むが量は少ない。遺構全体で出土した鉄滓の量はパンケース4箱相当と少量で、継続的な操業が行われたかどうか疑わしい。

なお、各遺構から出土した鉄滓などの製鉄関連遺物は以下でまとめて示しており、各遺物の概要是観察表で記述している。(Fig.22・23)

5. その他の遺構・遺物

(1) その他の遺構

SX-26 (Fig.24) 調査区南側の、竪穴住居検出面上で2個体の土器が並んで埋置されている状態を検出した。土器周囲を精査したが遺構掘り方を検出できず、この土器の出土状況をもって1遺構と見なすこととする。2個の土器は同一レベルで埋置され、土器底面とSC-27の検出面はほぼ同一である。土器はほぼ南北方向に並び、北側の土器は壺形土器の胴部を半截したものを横置し、南側の土器は鉢形土器を正位置で埋置している。

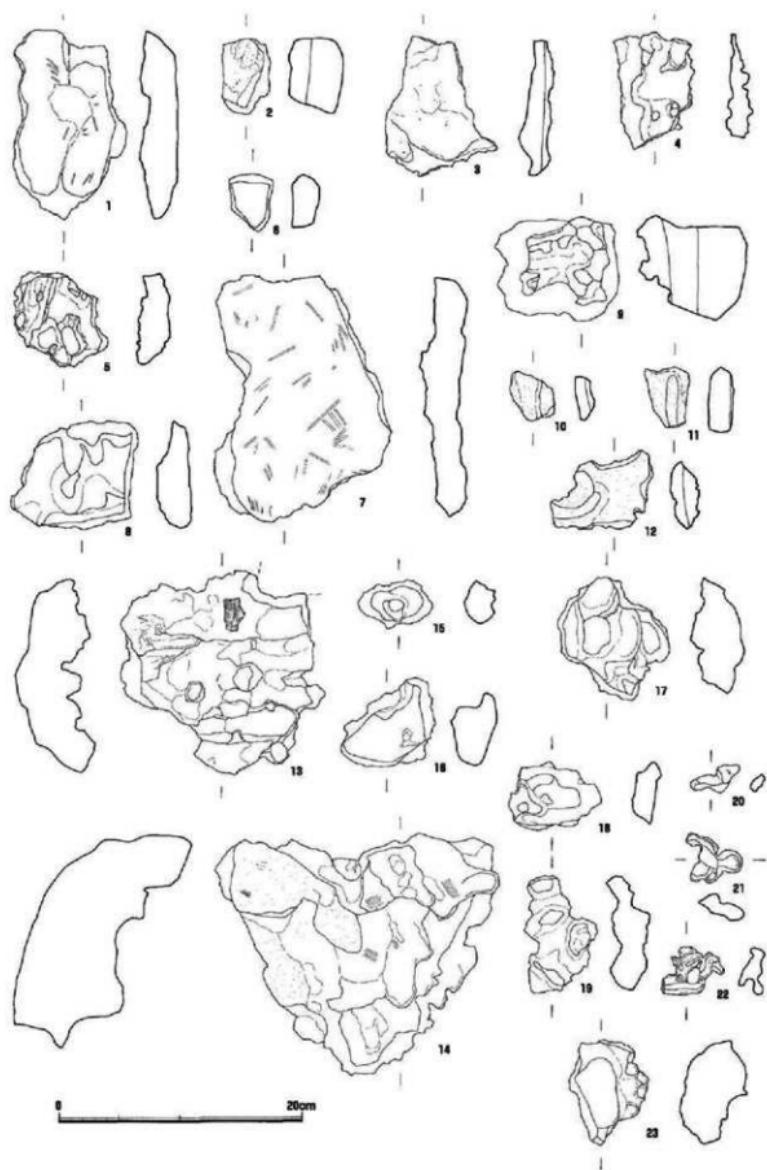


Fig.22 製鉄関連遺物実測図 1 (1/4)

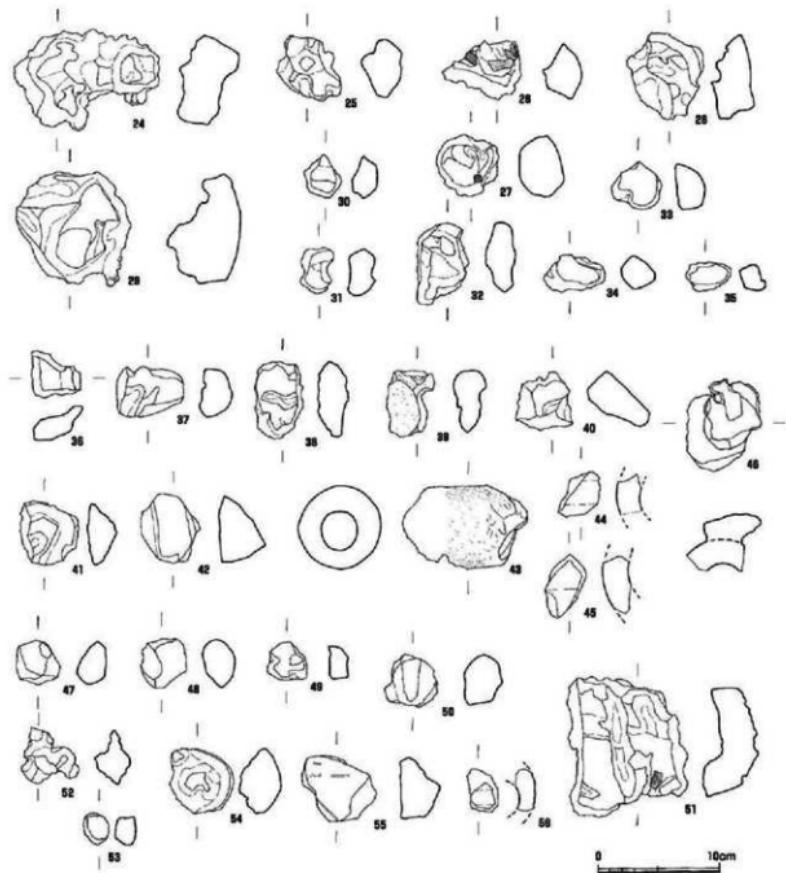


Fig.23 製鉄関連遺物実測図 2 (1/4)

出土遺物 (Fig.24) 55は遺構南側に埋置された土器で、完形の鉢形土器である。全体に半球形を呈し、底部は丸底で安定しない。口縁部は直立し、丸く收める。外面はナデ、内面は縱方向のケズリ後ナデ。56は遺構北側に埋置された土器で、壺形土器の胴部である。底部は丸底で、胴部は球形を呈し、胴部最大径は胴部中央部に位置するとみられる。遺存部分の最上部に頸部との屈曲部がわずかに残り、この部分から頸部が大きく開く器形を呈すると考えられる。

2つの遺物の時期は古墳時代前期とみられる。

SX-08 (Fig.25) 調査区西側で検出された遺構で、SC-27検出面より上面で検出される。平面形は梢

表1 飯氏遺跡群第8次調査 製鉄関連遺物観察表

遺物名	出土位置	部 位	目 標			出 地	表 面 狹 宽	備 考
			重 量(g)	長 度(cm)	幅 度(cm)			
1 SK-07	北側洋汎トレンジ	手縫(上段下平・焼熱)	209	35.5	9.2	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	表面は焼熱で、ツサ跡がある。内部は平行で本筋の内側 を走る。外側はくぼむ。	
2 SK-07	北側洋汎西端	手縫(上段下平・焼熱)	26	6.1	3.8	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	表面は焼熱で、ツサ跡がある。外側は灰褐色。	
3 SK-07	北側洋汎トレンジ	手縫(内段下平・通風孔)	143	11.5	9.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	表面は焼熱で、ツサ跡がある。表面は通風孔で 内側はくぼむ。外側は灰褐色。	
4 SK-07	北側洋汎西端	手縫(下段下平・平化)	159	9.4	6.0	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	表面はくぼ熱で、表面が削り取られ、内側は焼熱で ツサ跡がある。外側は灰褐色。	
5 SK-07	北側洋汎西端	手縫(下段下平・平化)	158	7.7	7.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	表面はくぼ熱で、表面が削り取られ、内側はニス有り焼 熱でツサ跡がある。	
6 SK-07	北側洋汎西端	手縫(コート部)(上段下平・凹凸端)	39	4.7	3.8	内面:灰褐色 外側:灰褐色	内側と外側同じ。表面は研耗跡がある。	
7 SK-07	北側洋汎トレンジ	手縫(コート部)(上段下平・焼熱)	164	38.4	14.2	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	表面はツサ跡(約1~2mm)が全く残らず、内側は 内側は灰褐色で、ツサ跡(約3~5mm)で残る。	
8 SK-07	北側洋汎トレンジ	手縫(コート部)(上段下平・焼熱)	167	18.4	8.9	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	表面はくぼ熱で、ツサ跡(約3~5mm)で残る。外側は灰褐色。	
9 SK-07	北側洋汎西端	手縫(コート部)(中段下平・平化)	451	18.7	9.0	内面:灰褐色 外側:灰褐色	表面はくぼ熱で、ツサ跡(約3~5mm)で残る。	メタル度(HC)
10 SK-07	北側洋汎トレンジ	手縫(中段焼成)	19	4.2	3.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	表面は焼熱で、ツサ跡(約3~5mm)で残る。外側は灰褐色。	メタル度(HC)
11 SK-07	北側洋汎西端	手縫(中段焼成)	36	5.4	3.6	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	表面は焼熱で、ツサ跡(約3~5mm)で残る。	メタル度(HC)
12 SK-07	北側洋汎トレンジ	手縫(中段焼成)	154	4.5	3.4	内面:灰褐色 外側:灰褐色	表面は焼熱で、ツサ跡(約3~5mm)で残る。	メタル度(HC)
13 SK-07	北側洋汎トレンジ	手縫(中段焼成孔端引打)	1258	14.8	16.6	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	表面は焼熱で、表面が内側に向いて。外側は焼熱で、 ツサ跡(約3~5mm)で残る。	メタル度(HC)
14 SK-07	北側洋汎トレンジ	手縫(凸)	1058	21	19.0	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	表面は焼熱で、ツサ跡(約3~5mm)で残る。内側は活潑な ツサ跡で、外側は、鋸歯状の付着する。	メタル度(HC)
15 SK-07	北側洋汎西端	手縫(凸)	44	6.1	4.0	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	表面は焼熱で、ツサ跡(約3~5mm)で残る。内側は活潑な ツサ跡で、外側は、鋸歯状の付着する。	
16 SK-07	北側洋汎西端	手縫(凸)	195	7.8	7.8	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	上口は焼熱で、表面はくぼむ。表面は見られる。下部は 焼熱で、ツサ跡(約3~5mm)で残る。	
17 SK-07	南側洋汎	手縫(凸)	282	18.6	8.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	上口は焼熱で、表面はくぼむ。表面は見られる。下部は 焼熱で、ツサ跡(約3~5mm)で残る。	
18 SK-07	北側洋汎西端	手縫(凸)	92	7.4	6.6	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	表面は焼熱で、表面はくぼむ。表面は見られる。	
19 SK-07	T型柱	手縫(凸)	132	9.6	5.5	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	表面は焼熱で、表面はくぼむ。表面は見られる。	メタル度(HC)
20 SK-07	南側洋汎	手縫(凸)(不定形)	58	4.9	2.5	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	手縫で焼熱をする。下部には凹字跡が付着する。	
21 SK-07	北側洋汎トレンジ	手縫(凸)(不定形)	29	4.6	4.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	手縫で焼熱をする。表面は見られる。下部には凹字跡が付着 する。	
22 SK-07	北側洋汎トレンジ	手縫(凸)(不定形)	28	3.1	3.3	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	手縫で焼熱をする。表面は見られる。発泡がみれる。	
23 SK-07	北側洋汎西端	手縫(平)(平焼軸)	273	8.5	6.3	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	上口は焼熱で、表面は見られる。下部は焼熱で、ツサ跡(約 3~5mm)で残る。	
24 SK-07	北側洋汎西端	手縫(平)	355	12.8	8.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	上口は焼熱で、表面は見られる。下部は手縫土付着する。	
25 SK-07	北側洋汎西端	手縫(平)	55	5.3	5.3	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	上口は一端焼熱があり、外側には付着する。内側は多く傷あ る。下部は手縫土付着する。	
26 SK-07	北側洋汎西端	手縫(平)	37	4.5	4.9	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	上口は一端焼熱があり、外側には付着する。内側は多く傷あ る。下部は手縫土付着する。	
27 SK-07	北側洋汎トレンジ	手縫(平)	87	3.2	3.2	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	上口は一端焼熱があり、外側には付着する。内側は多く傷あ る。下部は手縫土付着する。	
28 SK-07	北側洋汎トレンジ	手縫(平)	154	7.1	6.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	上口は焼熱で、表面は見られる。内側に焼熱が多く見られる。下部 は手縫土付着する。	
29 SK-07	北側洋汎西端	手縫(平)	458	9.4	8.8	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	上口は一端焼熱で、表面は見られる。下部は手縫土付着す る。	
30 SK-07	北側洋汎トレンジ	手縫(平)(合縫)	29	3.3	3.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	手縫で焼熱をする。	鉄化(△)
31 SK-07	北側洋汎トレンジ	手縫(平)(合縫)	71	2.8	2.7	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	手縫で焼熱をする。	鉄化(△)
32 SK-07	手縫(合縫)	81	6.7	4.3	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	上口は焼熱で手縫をする。下部は焼熱で付着し、一部に絆 合がある。	鉄化(△)	
33 SK-07	北側洋汎	手縫(合縫)	39	4.1	5.0	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	上口は焼熱で手縫をする。下部は焼熱で付着する。	メタル度(HC)
34 SK-07	T型柱	手縫(合縫)	38	3.1	3.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	手縫で焼熱をする。	メタル度(HC)
35 SK-07	北側洋汎	鐵製系遺物	39	3.7	2.3	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	手縫で焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	鉄化(△)
36 SK-07	鐵製筒(小)	37	4.1	3.8	2.8	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	上口は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	鉄化(△)
37 SK-07	鐵製筒(小)	117	5.9	4.2	2.7	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	中間に焼熱で、初めの堤と手縫をする。	
38 SK-07	鐵製筒(小)	36	6.3	4	2.5	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	上口は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
39 SK-07	鐵製筒(小)(小)(漆漆筒片付)	31	3.4	1	2.7	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	上口は焼熱で付着する。下部は漆漆筒片付。	
40 SK-07	同結合件	34	4.8	4.2	5.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	上口は焼熱で付着し、多孔化で劣化。下部は手縫で付着す る。	
41 SK-07	西結合台(合縫)	37	3.3	5.0	2.5	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	上口は焼熱で付着する。手縫である。下部は手縫で頭部多く 手縫で付着する。	メタル度(HC)
42 SK-07	手縫(織印)	59	5.7	4.2	3.8	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	上口は多くの織印がある。手縫である。下部は手縫で頭部多く 手縫で付着する。	メタル度(HC)
43 SK-07	漆	182	7.3	6.9	6.9	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	上口は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
44 SK-07	漆	22	3.7	3.4	3.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は多く手縫で付着する。内側は焼熱で付着する。	
45 SK-07	漆	29	3.1	4.2	3.2	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は多く手縫で付着する。内側は焼熱で付着する。	
46 SK-07	漆	73	8.2	4.7	4.7	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
47 SK-07	漆	39	3.4	3.1	2.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は多く手縫で付着する。内側は焼熱で付着する。	
48 SK-07	漆	39	4.1	3.2	2.8	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
49 SK-07	漆	182	7.3	6.9	6.9	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	上口は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
50 SK-07	漆	22	3.7	3.4	3.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は多く手縫で付着する。内側は焼熱で付着する。	
51 SK-07	漆	29	3.1	4.2	3.2	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は多く手縫で付着する。内側は焼熱で付着する。	
52 SK-07	漆	73	8.2	4.7	4.7	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
53 SK-07	漆	39	3.4	3.1	2.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は多く手縫で付着する。内側は焼熱で付着する。	
54 SK-07	漆	39	4.1	3.2	2.8	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
55 SK-07	漆	182	7.3	6.9	6.9	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	上口は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
56 SK-07	漆	22	3.7	3.4	3.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は多く手縫で付着する。内側は焼熱で付着する。	
57 SK-07	漆	29	3.1	4.2	3.2	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は多く手縫で付着する。内側は焼熱で付着する。	
58 SK-07	漆	73	8.2	4.7	4.7	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
59 SK-07	漆	39	3.4	3.1	2.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は多く手縫で付着する。内側は焼熱で付着する。	
60 SK-07	漆	39	4.1	3.2	2.8	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
61 SK-07	漆	182	7.3	6.9	6.9	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	上口は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
62 SK-07	漆	22	3.7	3.4	3.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は多く手縫で付着する。内側は焼熱で付着する。	
63 SK-07	漆	29	3.1	4.2	3.2	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は多く手縫で付着する。内側は焼熱で付着する。	
64 SK-07	漆	73	8.2	4.7	4.7	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
65 SK-07	漆	39	3.4	3.1	2.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は多く手縫で付着する。内側は焼熱で付着する。	
66 SK-07	漆	39	4.1	3.2	2.8	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
67 SK-07	漆	182	7.3	6.9	6.9	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	上口は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
68 SK-07	漆	22	3.7	3.4	3.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は多く手縫で付着する。内側は焼熱で付着する。	
69 SK-07	漆	29	3.1	4.2	3.2	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は多く手縫で付着する。内側は焼熱で付着する。	
70 SK-07	漆	73	8.2	4.7	4.7	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
71 SK-07	漆	39	3.4	3.1	2.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は焼熱で付着する。	
72 SK-07	漆	39	4.1	3.2	2.8	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
73 SK-07	漆	182	7.3	6.9	6.9	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	上口は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
74 SK-07	漆	22	3.7	3.4	3.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は多く手縫で付着する。内側は焼熱で付着する。	
75 SK-07	漆	29	3.1	4.2	3.2	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は多く手縫で付着する。内側は焼熱で付着する。	
76 SK-07	漆	73	8.2	4.7	4.7	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
77 SK-07	漆	39	3.4	3.1	2.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は焼熱で付着する。	
78 SK-07	漆	39	4.1	3.2	2.8	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
79 SK-07	漆	182	7.3	6.9	6.9	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	上口は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
80 SK-07	漆	22	3.7	3.4	3.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は焼熱で付着する。	
81 SK-07	漆	29	3.1	4.2	3.2	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
82 SK-07	漆	73	8.2	4.7	4.7	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
83 SK-07	漆	39	3.4	3.1	2.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は焼熱で付着する。	
84 SK-07	漆	39	4.1	3.2	2.8	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
85 SK-07	漆	182	7.3	6.9	6.9	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	上口は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
86 SK-07	漆	22	3.7	3.4	3.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は焼熱で付着する。	
87 SK-07	漆	29	3.1	4.2	3.2	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
88 SK-07	漆	73	8.2	4.7	4.7	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
89 SK-07	漆	39	3.4	3.1	2.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は焼熱で付着する。	
90 SK-07	漆	39	4.1	3.2	2.8	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
91 SK-07	漆	182	7.3	6.9	6.9	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	上口は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
92 SK-07	漆	22	3.7	3.4	3.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は焼熱で付着する。	
93 SK-07	漆	29	3.1	4.2	3.2	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
94 SK-07	漆	73	8.2	4.7	4.7	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
95 SK-07	漆	39	3.4	3.1	2.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は焼熱で付着する。	
96 SK-07	漆	39	4.1	3.2	2.8	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
97 SK-07	漆	182	7.3	6.9	6.9	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	上口は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
98 SK-07	漆	22	3.7	3.4	3.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は焼熱で付着する。	
99 SK-07	漆	29	3.1	4.2	3.2	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
100 SK-07	漆	73	8.2	4.7	4.7	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
101 SK-07	漆	39	3.4	3.1	2.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は焼熱で付着する。	
102 SK-07	漆	39	4.1	3.2	2.8	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
103 SK-07	漆	182	7.3	6.9	6.9	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	上口は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
104 SK-07	漆	22	3.7	3.4	3.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は焼熱で付着する。	
105 SK-07	漆	29	3.1	4.2	3.2	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
106 SK-07	漆	73	8.2	4.7	4.7	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
107 SK-07	漆	39	3.4	3.1	2.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は焼熱で付着する。	
108 SK-07	漆	39	4.1	3.2	2.8	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
109 SK-07	漆	182	7.3	6.9	6.9	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	上口は焼熱で付着する。内側は多く手縫で付着する。	
110 SK-07	漆	22	3.7	3.4	3.1	内面:明赤褐色 外側:灰褐色	内側は焼熱で付着する。内側は焼熱で付着する。	
111 SK-07	漆							

表2 製鉄関連遺物構成表

表3 製鉄関連遺物構成表2

		SK-01		SK-04		SK-05		
楕形鍛冶炉 (小量生産炉)	再結合炉	炉壁(鍛冶炉)	鍛冶炉(合鉢)	楕形鍛冶炉(工具板付)	鍛冶炉(合鉢)	炉壁(鍛冶炉)	銅(△)	

円形で長軸は略南北方向にとり、長軸方向は掘立柱建物群の長軸と平行あるいは直交方向に一致する。断面形は皿形で深さは浅く、10cm未満の深さにとどまる。遺構内からは土器の小片が集中して出土しており、土器が流れ込んで堆積した様相を示す。遺構形状からは人工的なもの、自然的なもののいずれの可能性も考えられるが遺構の主軸方向から建物群に関わる人為的な掘り方を想定している。出土遺物(Fig.26 57~59) 遺構内からの出土遺物は弥生土器、土師器などを中心とする。完形に近い土器は少なく、破片、小片が多い。57・58は鉢で、いずれも丸底で胴部は球形に広がり、口縁端部は丸くおさめる。外面はナデ、内面はナデまたはケズリ。59は椭形土器の底部をカッブ状に打ち欠いた土製品。底部は丸みをもち、弥生後期後半の様相を示す。

遺物の年代は弥生時代中期～古墳時代前半の様相を示すが、遺構検出面のレベルや遺構の中軸方向と掘立柱建物との関連が強いことから、古代に属すると考えたい。

SK-14 (Fig.25) 調査区南東隅で検出した土坑で、掘立柱建物の検出面とほぼ同レベルで検出される。平面形は梢円形を呈し、壁面は直に近い角度で立ち上がる。検出面からの深さは20cm前後で、底面は

ほぼ平坦で、床面レベルで SD-24 の上面を検出する。

出土遺物 (Fig.26 65・66) 遺構内からは弥生土器、土師器、須恵器破片が出土した。65・66はいずれも須恵器壊身で、いずれも壊部はやや浅く、65は立ち上がりがやや内傾しながら立ち上がる。66は立ち上がりが短く、やや内傾気味に立ち上がる。いずれも 6 世紀後半のものとみられる。

SD-24 (Fig.25) 調査区南東隅で検出した溝状遺構。SK-14 の床面で検出され、南側の SK-15 床面にも連続する溝状遺構が検出されたため、併せて SD-24 とする。幅 60cm、検出面からの深さは 10~15cm で比較的浅い。溝はほぼ南北方向に直線的に延びている。

出土遺物 (Fig.26 64) 弥生土器、土師器、須恵器を含む。いずれも小片で図示できるものは少ない。64は須恵器杯蓋。天井部から口縁部にかけて丸く開き、口縁部は丸くおさまる。天井部は回転ヘラケズリ、体部と内面は回転横ナデ。上述の SK-14 出土須恵器と同様に 6 世紀後半のものとみられる。

(2) 各柱穴出土遺物 (Fig.26)

各柱穴から出土した遺物のうち、確認できた掘立柱建物に關わらない柱穴から出土した遺物を提示する。

60は SP-170出土の壺形土器で、口縁部は短く外反し、端部は太く丸める。胴部は球形だが凹凸が目立ち、器壁が厚めである。胴部外面は縦方向の粗いハケメ、内面は左上方向ケズリ痕が残る。61は SP-242出土の小型丸底壺。頸部はわずかに開き気味に立ち上がり、口縁部は丸く収める。胴部は球形で底部は丸底を呈する。外面は縦方向ハケメ、内面はナデで指圧痕が残る。全体に凹凸が目立ち、器壁も厚めである。62は SP-204出土の壺形土器。頸部は短く直立し、指圧成形を行う。胴部は内外面とも風化、剥落が著しい。63は SP-204出土の鉢形土器。底部はやや平底気味で、体部は開き気味に立ち

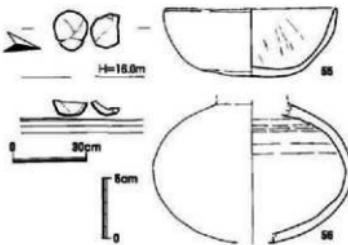


Fig.24 SX-26遺構・遺物実測図 (1/20・1/4)

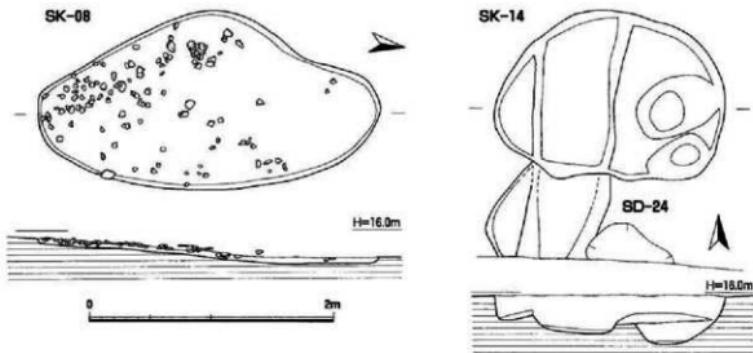


Fig.25 SK-08・14・24遺物実測図 (1/40)

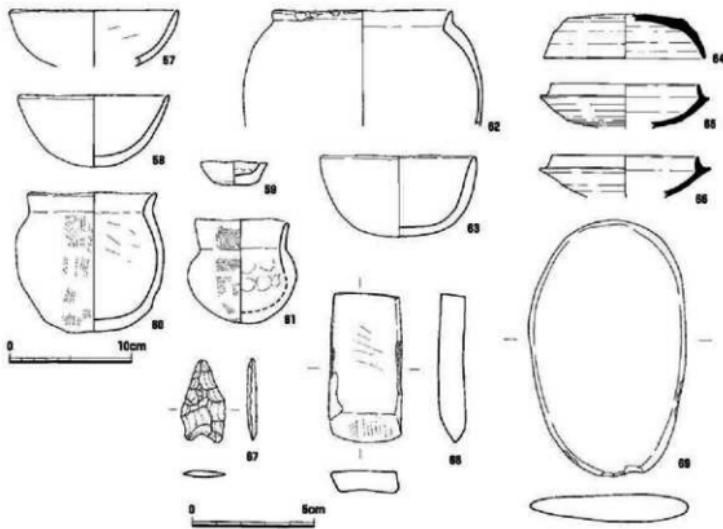


Fig.26 各造構出土遺物実測図 (1/4・石器は1/2)

上がる。底部、体部とも器壁が厚めである。

67～69は石器でいずれも縄文時代から弥生時代にかけてのものである。67はSP-175出土の打製石鎌で、安山岩製。脚部や先端部に丸みがみられ、全体に摩耗が進む。丘陵上方からの流れ込みであろう。68はSP-225出土の扁平片刃石斧。基部面には粗く切られた痕跡が残り、側面と背面上には装着時のものとみられる粗い擦痕がみられる。刃部は両面から研がれ、シャープさを残す。69はSP-204出土の叩石と見られる楕円形の板石で、側面に叩打痕とみられる凹凸がみられる。

(2) 包含層出土遺物 (Fig.27)

70は弥生後期の變形土器で、ほぼ半周分の破片が検出された。口縁部は外反気味に開き、口縁端部は横ナデで面取りを行う。胴部は長胴で、底部は凸レンズ状に膨らむ。口縁部は内外面ともナデ、胴部は外表面は縦方向ハケメ、内面は上位横方向ハケメ、中位縦方向ケズリ、底部は縦方向ハケメで指圧痕が残る。弥生後期後半の遺物である。71・72は須恵器大甕の口縁部。71は口縁部が外反し、口縁端部は横ナデにより2カ所に面取りを行い、断面形状は口縁先端部が膨らむような形になる。口縁内外面は回転横ナデ、頭部屈曲部内面は回転横ナデ後横方向のナデ。72は口縁部が外反気味に立ち上がり、端部は横ナデにより面取する。胴部と口縁部の境界の屈曲部外面には手描きの沈線が1条回る。内外面とも回転横ナデで、内面には指または工具との接触痕が残る。73は須恵器杯身。受け部は内傾しながら高く立ち上がり、端部は横ナデで面を作る。体部は扁平で底部は広い。外面底面は回転ヘラケズリ、体部外表面と内面は回転横ナデ。6世紀前半のものである。74は石包丁破片。復元長10～12cm程度とみられる。

75は高杯で、ほぼ完形に復元できる。杯部は底部が平坦で体部は屈曲して開きながら外反気味に立

ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。脚部は太く、大きく開きながら広がる。76は壺形土器の頸部破片と見られる。破片上部に口縁部に連続する外反部分がみられる。外面にヘラ書きによる綾杉文状の文様を施しており、山陰系壺形土器の影響を受けた土器と考えられる。弥生後期以降でこの文様モチーフを持つ土器は糸島半島では三雲遺跡等で類例がある（註）。

（3）その他の遺物

77・78は鉄器。77はSC-30 P-2から出土したもので幅9mm、残存長5.5cm、厚さ2.5mmで、棒状を呈する。78も棒状の鉄器で、SP-168 (SB-46) から出土し、幅10mm、残存長6.3cm、厚さ3.5mmを測る。いずれも鍛造で、断面形状からは刃部などは確認できない。いずれも鏃と考えられる。

79はSP-178出土の滑石製品。真円形で径2.6cm、厚さ4mm。粗めの滑石で作られ、表裏両面とも平滑に研磨する。側面も研磨して面取りする。紡錘車や祭器の未製品の可能性もあるが、用途は不明である。

（註）

『三雲遺跡IV』(福岡県文化財調査報告書第65集 1983) 寺口地区包含層出土遺物のうち、山陰系壺形土器の口縁部と頸部に板目押しの羽状文が施文されている。

『志登遺跡群B地点』(前原町文化財調査報告書第16集 1984) SD-03出土遺物中の土師器高杯の脚部に施文している。

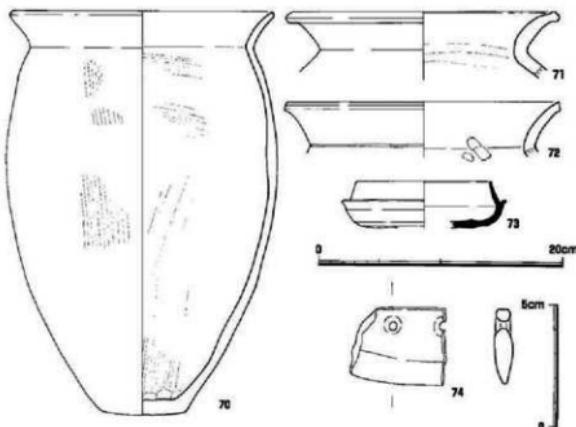


Fig.27 包含層出土遺物実測図 (1/4・石器は1/2)

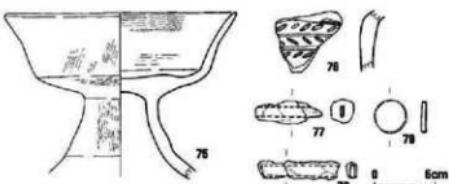


Fig.28 各遺構・包含層出土遺物実測図 (1/4)

第4章 総括

1. 飯氏遺跡群全体の中での今回調査の位置づけ

今回の調査では弥生時代後期から古墳時代にかけての堅穴住居址、古代の製鉄炉と掘立柱建物を検出した。飯氏遺跡群の内部でこれと同時期同種類の遺構を検出した例として、第1次調査で後期の木棺墓を検出した例、第2次調査で古墳時代の掘立柱建物の検出例、第3次調査I区で古墳時代前期から中期の集落、第6次調査で古墳時代の住居址を検出した例がある。今回検出した堅穴住居はこの調査例のなかでも特に第3次調査I区で検出された堅穴住居群の様相に最も近いと考えられる。

第3次調査I区では、弥生時代末～古墳時代にかけて59軒の堅穴住居を検出しており、古墳時代前期に集落の最盛期を迎えている。今回調査した集落とは一定期間共存していることは確実である。今回の調査区と第3次調査区との直線距離は300m程度で、連続した集落としてまとまると言えると相当大規模な集落を想定する必要があり、その場合糸島平野全体をみると三雲地区の集落と同時期に直線で2km以下の距離を挟んで大規模な集落が併存していたと想定することには無理がある。むしろ飯氏地区については瑞梅寺川をのぞむ高祖山麓の段丘上の狭小な平坦面ごとに小規模な集落が散在していたと想定することが適当と考えられる。

また、今回調査区内で多量に出土した弥生中期の遺物について、弥生中期の遺構が調査区内で検出されなかったことおよび、弥生時代の遺物の大部分が風化、摩滅が著しいことを考慮すると、これらの遺物は調査区東側の丘陵上から流れ込んだ、あるいは造成土として持ち込まれたものと考えられる。東側の丘陵で過去に行われた第6次調査では弥生中期の甕棺墓群を検出しており、その時期に該当する集落が近隣に存在する可能性は十分考えられる。今回検出された遺物はこの集落が調査区の東側に隣接して存在することを示唆するものである。

2. 飯氏二塚古墳との関連性

今回の調査区の北東側90mに前方後円墳である飯氏二塚古墳が隣接する。実際には比高差が10m以上あるので近接している風はそれほど感じられない。飯氏二塚古墳については過去2回の調査を行っており(註)、出土遺物から6世紀初頭～前半の時期が想定されている。今回の調査区から検出された遺構・遺物のうち飯氏二塚古墳と時期的に近い遺物は包含層出土遺物の須恵器环身などごく少数である。遺構にいたっては該当する時期に属するものは検出されていない。

古墳築造時期の前後については、出土遺物から見て堅穴住居群の継続時期が5世紀中頃以降まで下るとは考えづらく、SD-24から出土している須恵器は6世紀後半とみられることから、古墳築造時期を挟んでおよそ100年間以上の空白域が存在する。古墳築造当時に古墳に近接して集落があったという景観は、今回の調査結果からは想定困難である。

(註)

『飯氏二塚古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第435集 1995

『飯氏二塚古墳2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第780集 2003



(1) 調査区北半全景



(2) 調査区南半全景

図版 2



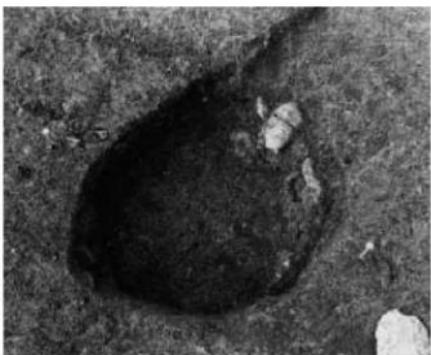
(1) 調査区北壁土層



(2) 調査区東壁土層



(3) SK-01～05検出状況（南から）



(4) SK-01羽口検出状況



(5) SK-07（西から）



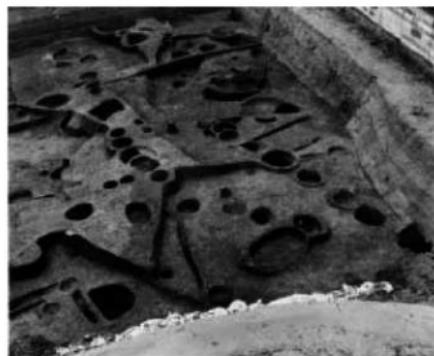
(6) SC-23（南から）



(1) SC-27 (北から)



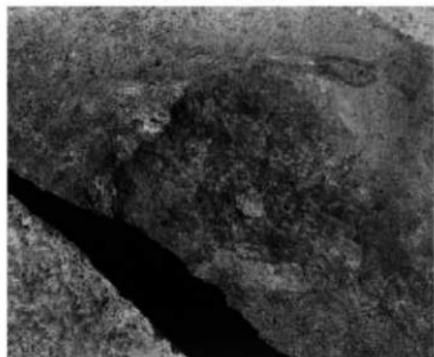
(2) SC-35 (南から)



(3) SC-36・37 (南から)



(4) SC-29・38北半 (西から)



(5) SC-33炉検出状況 (北西から)



(6) SC-33炉土層断面 (南から)

図版 4



出土遺物

- 32 -

報告書抄録

ふりがな	いいじいせきぐん3						
書名	飯氏遺跡群3						
副書名							
巻次							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第788集						
編著者名	大塚紀宣						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8-1						
発行年月日	平成16年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
飯氏遺跡群	福岡市西区大字千里 字扇子276-4・276-11・279-4	40135 0685	33°33'38"	130°13'42"	1996.11.6 ～ 1996.12.11	308m ²	個人住宅建築
遺跡種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
集落	弥生時代・ 古墳時代・ 古代	堅穴住居跡14・掘立柱建物3 ・製鉄炉1・鍛冶炉5	弥生土器・土師器・須恵器 ・鉄滓				

飯氏遺跡群3

2004年（平成16年）3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 株式会社 川島弘文社

福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6番41号